

北海道立埋蔵文化財センター 重要遺跡確認調査報告書

第10集

**平成26年度
北海道立埋蔵文化財センター**

北海道立埋蔵文化財センター 重要遺跡確認調査報告書

第10集

**平成26年度
北海道立埋蔵文化財センター**



岩内町東山 1 遺跡周辺の空中写真（昭和51年撮影国土地理院空中写真を複製）
上が北を示す。白枠部分が今年度調査区

図絵 2



岩内町東山1遺跡調査状況（西から）

図絵 3



湧別町シブノツナイ竪穴住居群（東から）

例　　言

- 1 本書は平成26年度に北海道立埋蔵文化財センター指定管理者 公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施した重要遺跡確認調査の報告書（第10集）である。
- 2 本報告書では岩内町東山1遺跡、湧別町シブノツナイ堅穴住居群についての調査成果と芦別市野花南周堤墓群に係る踏査の内容を所収した。
- 3 本書の執筆は鎌田望、吉田裕吏洋、藤井浩が分担した。編集は藤井が担当した。各章の分担はⅠ章藤井、Ⅱ章藤井、鎌田、吉田、Ⅲ章藤井、Ⅳ章藤井である。
- 4 岩内町東山1遺跡の発掘調査での写真撮影及び図版作成は吉田裕吏洋が行った。湧別町シブノツナイ堅穴住居群及び芦別市野花南周堤墓群での踏査の撮影は藤井が行った。
- 5 基準点測量およびトータルステーションシステム、遺跡管理システムなど測量機材の借用については株シン技術コンサルに委託した。特に、現地では作業員への機材操作指導などの協力も得た。
- 6 調査・報告にあたり、下記の諸機関及び各位のご指導・ご協力をいただいた（順不同・敬称略）。

北海道教育庁生涯学習部文化財・博物館課

北海道大学 小杉康

岩内町教育委員会 中村輝幸 川上清輝

湧別町教育委員会 牧野裕司 岡崎公俊 梅津茂樹 中島一之 林 勇介

芦別市教育委員会 芦別市星の降る里百年記念館：長谷山隆博

岩内町東山保育園 本庄 博

職業訓練法人 岩内地域人材開発センター

目 次

口絵
例言
目次
挿図目次
表目次
写真図版目次

I 重要遺跡確認調査について

1 重要遺跡確認調査について	1
2 今年度の調査について	1

II 岩内町東山1遺跡の調査

1 調査の概要	3
(1) 調査要項	3
(2) 調査の経緯	3
(3) 調査体制	3
(4) 調査の経過	4
i 発掘調査	4
ii 関連資料調査	4
2 遺跡の位置と環境	4
3 発掘調査	6
(1) 調査の方法	6
i 調査範囲	6
ii 発掘調査	6
iii 基本土層	8
iv 測量と記録	8
v 資料整理	8
(2) 各発掘区（グリッド及びトレンチ調査）の状況	10
i 東山15区	10
ii 東山16-1・2区	23
(3) 出土遺物	27
4 調査のまとめと今後の調査について	28

III 湧別町シブノツナイ豎穴住居群の調査

1 調査の概要	32
(1) 調査要項	32
(2) 調査の経緯	32
(3) 調査の経過	32
2 遺跡の位置と環境	33
3 踏査及び関連資料調査	34

(1) 踏査及び現況確認	34
(2) 既往の調査と資料の現況	34
(3) 「湧別町シブノツナイ遺跡立て穴位置図」	36
4 調査のまとめと今後の調査について	36

IV 芦別市野花南周堤墓群の調査

1 調査の概要	38
(1) 調査要項	38
(2) 調査の経緯と経過	38
2 踏査の内容	38
3 今後の調査について	40
写真図版	41
報告書抄録	73

挿図目次

図 I-1 国、道指定史跡の位置と重要遺跡確認 調査対象遺跡	1
図 II-1 遺跡の位置	5
図 II-2 平成26年度調査区設定図	7
図 II-3 発掘区 1	9
図 II-4 発掘区 2	11
図 II-5 発掘区 3	12
図 II-6 発掘区 4	14
図 II-7 発掘区 5	15
図 II-8 発掘区 6	17
図 II-9 発掘区 7	18
図 II-10 発掘区 8	20
図 II-11 発掘区11	21
図 II-12 発掘区12	22
図 II-13 発掘区9	24
図 II-14 発掘区10	25
図 II-15 発掘区13	26
図 II-16 発掘区14	27
図 II-17 東山15、16-1・2区確認遺構位置図	29
図 II-18 東山1遺跡内における調査結果概要	30
図 III-1 遺跡の位置と周辺地形図	33
図 III-2 シブノツナイ遺跡立て穴位置図（昭和 41年作成）	35
図 III-3 國土地理院地形図とシブノツナイ遺跡 立て穴位置図合成図	37
図 IV-1 芦別市野花南周堤墓群周辺の地形環境 と遺跡位置図	39
図 IV-2 野花南環状土籬見取り図（郷土研究19 号より抜粋）	40

表目次

表 I-1 重要遺跡確認調査概要一覧	2
表 II-1 岩内町東山1遺跡確認及び調査遺構数 一覧	31
表 III-1 発掘調査された豎穴一覧	37

写真図版目次

口絵1 岩内町東山1遺跡周辺の空中写真	
口絵2 岩内町東山1遺跡調査状況(西から)	
口絵3 湧別町シブノツナイ豎穴住居群（東 から）	
図版II-1 遺跡の位置と周辺の空中写真 1997 年撮影	
図版II-2 遺跡の位置と遠景	
1 岩内岳麓から	
2 岩内港から	
図版II-3 道指定史跡岩内東山円筒文化遺跡 現況	
1 現況（北から）	
2 指定碑周辺（南東から）	
図版II-4 岩内遺跡第2地点 現況	
1 現況（西から）	
2 昭和47年町教委による「東山遺 跡発掘由来」（南西から）	
図版II-5 東山15、16-1・2区調査前の現況	
1 15区（西から）	
2 16-1・2区（北西から）	
図版II-6 調査の経過	
1 重機による表土除去（北から）	
2 人力による精査（西から）	
3 測量（北から）	
4 トレンチの設定と掘り下げ（東 から）	

- 図版II-7 発掘区1
- 1 全景（南東から）
 - 2 東壁面（南西から）
- 図版II-8 発掘区2
- 1 全景（北西から）
 - 2 東壁面（南西から）
- 図版II-9 発掘区3
- 1 全景（北西から）
 - 2 東壁面(竪穴住居跡部分 東から)
- 図版II-10 発掘区4
- 1 全景（南から）
 - 2 西壁面（南西から）
 - 3 遺物出土状況（北から）
- 図版II-11 発掘区5
- 1 全景（南東から）
 - 2 西壁面（南東から）
 - 3 西壁面土層断面盛土部分（東から）
 - 4 トレンチ内竪穴住居側（南東から）
- 図版II-12 発掘区6
- 1 全景（北西から）
 - 2 トレンチ土層断面北側（西から）
 - 3 トレンチ土層断面南側（西から）
- 図版II-13 発掘区7
- 1 全景（北東から）
 - 2 柱穴状ピット7-1調査状況（東から）
 - 3 西壁面（東から）
- 図版II-14 発掘区8
- 1 全景（南東から）
 - 2 西壁面調査状況（東から）
- 図版II-15 発掘区11
- 1 盛土上面全景（東から）
 - 2 トレンチ掘り下げ時の盛土上面
遺物出土状況（南から）
- 図版II-16 発掘区11
- 1 トレンチ盛土部分土層断面（東から）
 - 2 トレンチ盛土部分南側土層断面（南東から）
 - 3 トレンチ盛土部分北側土層断面（東から）
- 図版II-17 発掘区11、12
- 1 11区盛土部分遺物出土状況（北東から）
 - 2 12区全景（北東から）
- 図版II-18 発掘区9
- 1 全景（東から）
 - 2 北壁面（南から）
- 図版II-19 発掘区10
- 1 全景（南から）
- 2 南壁面（北東から）
- 図版II-20 発掘区13
- 1 全景（南西から）
 - 2 北壁面（南から）
- 図版II-21 発掘区14
- 1 全景（北東から）
 - 2 北壁面（南西から）
- 図版II-22 東山15区調査状況
- 1 全景（西から）
 - 2 西側部分（北から）
- 図版II-23 発掘区埋戻し状況
- 1 重機による埋戻し（東から）
 - 2 トレンチ養生状況（北東から）
 - 3 トレンチ養生状況（南から）
 - 4 東山16-1・2区埋戻し完了状況（北から）
 - 5 東山15区埋戻し状況（南東から）
- 図版III-1 遺跡の位置と周辺の空中写真 1997年撮影
- 図版III-2 シブノツナイ竪穴住居群の現況
- 1 住居群西側部分（東から）
 - 2 住居群東側部分（東から）
- 図版III-3 シブノツナイ竪穴住居群の現況
- 1 保安林内の竪穴住居群（北から）
 - 2 道路と竪穴の状況（西から）
- 図版III-4 昭和41年調査時の状況写真（遠景
湧別町教委所蔵）
- 図版III-5 昭和41年調査時の状況写真（竪穴調査状況 湧別町教委所蔵）
- 図版III-6 昭和41年調査時の状況写真（竪穴出土の遺物 湧別町教委所蔵）
- 図版IV-1 芦別市野花南周堤墓群と周辺遺跡の踏査状況
- 1 調査後の周堤墓群の状況（北から）
 - 2 周堤墓群に隣接する南側地区の状況（西から）
 - 3 日時計状配石遺構地区の遠景（南から）
 - 4 日時計状配石遺構地区の現況（南から）
 - 5 野花南熊の沢遺跡への経路（北から）
 - 6 野花南熊の沢遺跡の遠景（東から）
 - 7 野花南熊の沢遺跡での礫出土状況（東から）
 - 8 野花南熊の沢遺跡での礫出土状況（西から）

I 重要遺跡確認調査について

1 重要遺跡確認調査について

北海道立埋蔵文化財センターは、北海道教育委員会（以下、道教委）が北海道史をたどる上で重要なとした遺跡の重要遺跡確認調査を行ってきた。これまでに、平成12年度に小樽市・余市町の西崎山ストーンサークル、13・14年度に奥尻町青苗砂丘遺跡、15・16年度に恵山町（現函館市）恵山貝塚、17～21年度に幌延町・豊富町の音類竪穴群、22・23年度には斜里町斜里朱円周堤墓群（道指定史跡：指定名称「斜里朱円周堤墓群」）で実施した。24・25年度は芦別市野花南周堤墓群（道指定史跡：指定名称「野花南周堤墓群」）の調査を行った。

2 今年度の調査について

指定管理第3期の初年度にあたり、平成26～29年度重要遺跡確認調査実施要領が通知され、岩内町東山1遺跡、湧別町シブノツナイ竪穴住居群、オホーツク海沿岸の竪穴遺跡群の調査が指示された。今年度においては、岩内町東山1遺跡と湧別町シブノツナイ竪穴住居群を調査対象とすることになった。

この指示を受け、道教委及び岩内町教育委員会との打ち合わせにより、東山1遺跡について発掘を主とした調査が最優先であること、シブノツナイ竪穴住居群については次年度調査のための準備及び資料収集を行うこととなった。特に東山1遺跡では遺跡範囲内の東山15、16-1・2番地での発掘調査を実施した。

また、今年度より、調査成果を報告する重要遺跡確認調査報告書については、年度ごとに報告書を刊行する年次報告となった。

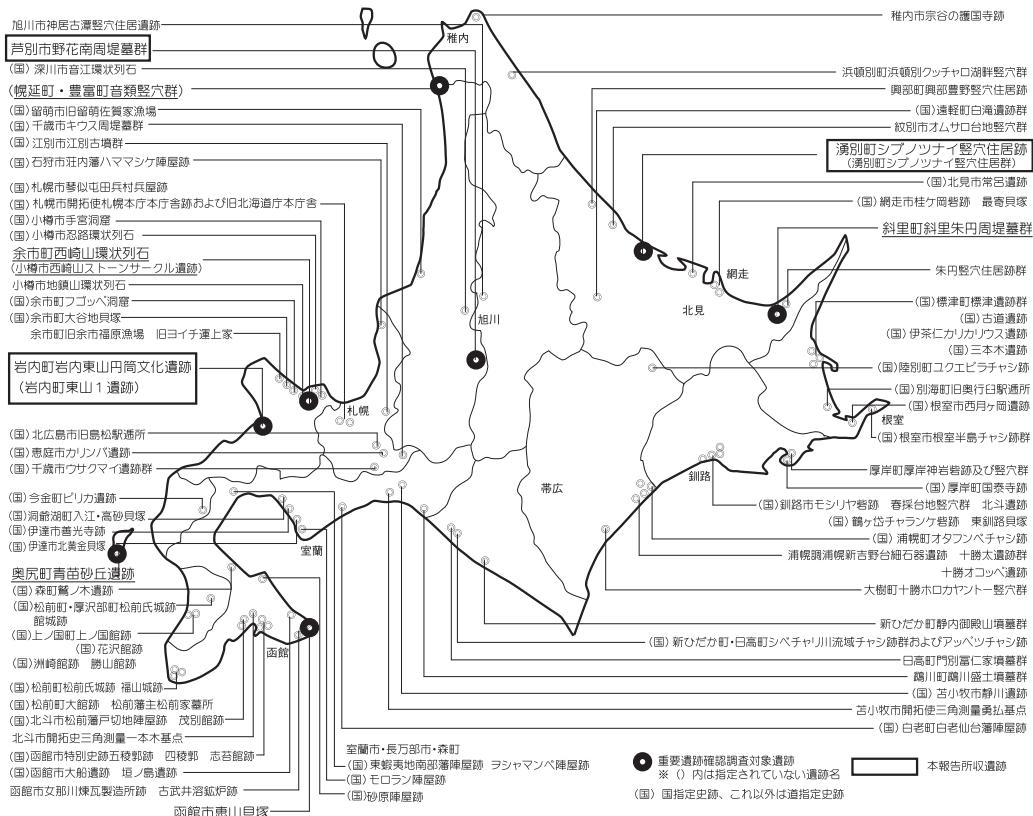


図 I-1 国、道指定史跡の位置と重要遺跡確認調査対象遺跡

重要遺跡確認調査報告書

表 I - 1 重要遺跡確認調査概要一覧

年度	対象遺跡	登録番号	所在地	種別	主な調査方法	調査面積	主な時期	主な遺構	主な出土遺物	掲載報告書
平成12年度	小樽市・余市町西崎山ストーンサークル	01203-D-01-64(小樽市) 01408-D-19-04(余市町)	小樽市蘭島 余市町栄町	配石 遺構	発掘調査	140m ²	縄文時代 後期	配石遺構	縄文時代後期、晚期の土器、黒曜石の剥片	重要遺跡確認調査報告書 第1集
平成13年度	奥尻町青苗砂丘遺跡	01367-C-07-4	奥尻郡奥尻町字青苗364・368番地	集落跡	発掘調査	90m ²	オホーツク文化期 擦文時代	住居跡1軒 土壙1基 貝塚1か所 焼土3か所	オホーツク式土器、 土師器 石器、石製品 骨角器 金属製品 自然遺物	重要遺跡確認調査報告書 第2集
平成14年度	奥尻町青苗砂丘遺跡	01367-C-07-4	奥尻郡奥尻町字青苗364・368番地	集落跡	発掘調査	90m ²	オホーツク文化期 擦文時代	住居跡4軒 墓2か所 貝塚1か所	恵山式土器 オホーツク式土器 土師器及び擦文土器 石器類玉など石製品 骨角製品、金属製品、自然遺物	重要遺跡確認調査報告書 第3集
平成15年度	函館市惠山貝塚	01202-B-10-35	函館市字恵山308番地の1ほか	貝塚	発掘調査	97m ²	統縄文時代 前半	竪穴式建物の可能性のあるもの6か所 墓の可能性のあるもの4か所 遺構覆土中に形成された魚骨層を2か所で確認	土器、石器、骨角器	重要遺跡確認調査報告書 第4集
平成16年度	函館市惠山貝塚	01202-B-10-35	函館市字恵山308番地の2ほか	貝塚	発掘調査	169m ²	統縄文時代 前半	盛土遺構(統縄文時代のもので、厚さは1mを超える) 竪穴住居跡1か所 土壙2か所 集積1か所 焼土	土器、石器、 骨角製品	重要遺跡確認調査報告書 第5集
平成17年度	幌延町・豊富町音類 竪穴群	01488(幌延町)- 01510(豊富町)- G-09-01	天塩郡幌延町字浜里188 ほか 国有林174~175林班	集落跡	測量調査 踏査	約7km ²	擦文時代 アイヌ文化期	竪穴群40地区 竪穴状の窪み 796か所 チャシ跡3か所	踏査のため出土遺物はなし	重要遺跡確認調査報告書 第6集
平成18年度										重要遺跡確認調査報告書 第7集
平成19年度										重要遺跡確認調査報告書 第8集
平成20年度										重要遺跡確認調査報告書 第9集
平成21年度										重要遺跡確認調査報告書 第10集
平成22年度	斜里町斜里朱円周堤墓群	01545-I-08-38	斜里郡斜里町朱円西76番地1	墳墓	発掘調査	210m ² (トレンチ調査面積)	縄文時代 後期	周堤墓2基(A号、B号)	縄文土器片 ※昭和23、24年度調査時の出土遺物の資料化を行う(道指定有形文化財 斜里朱円周堤墓群出土品)	重要遺跡確認調査報告書 第8集
平成23年度	斜里町斜里朱円周堤墓群	01545-I-08-38	斜里郡斜里町朱円西76番地1	墳墓	発掘調査	210m ² (トレンチ調査面積)	縄文時代 後期	周堤墓2基(A号、B号)	縄文土器片 ※昭和23、24年度調査時の出土遺物の資料化を行う(道指定有形文化財 斜里朱円周堤墓群出土品)	重要遺跡確認調査報告書 第8集
平成24年度	芦別市野花南周堤墓群	01216-E-04-021	芦別市野花南町3256, 3257	墳墓	発掘調査	86.5m ² (トレンチ調査面積)	縄文時代 後期	周堤墓2基(1号、2号)	縄文時代後期から晚期土器片、黒曜石器類	重要遺跡確認調査報告書 第9集
平成25年度	岩内町東山1遺跡	01402-D-13-01	岩内郡岩内町東山15、16-1・2番地	集落跡	発掘調査	600m ² (トレンチ調査等面積)	縄文時代 前期 縄文時代 中期	盛土遺構1 竪穴住居跡4 土坑13 柱穴状ピット7 焼土12 (表面確認分を含む)	縄文土器片 (前期から中期) 石器類 (礫石器を主とする)	重要遺跡確認調査報告書 第10集
平成26年度	湧別町シブノツナイ竪穴住居群	01216-I-21-35	北海道湧別群湧別町川西499-1, 499-2 930 722-1 722-2 722-3 720 719 503 502-1, 2 714 717 718	集落跡	踏査	139486m ² (史跡指定範囲及び測量範囲)	擦文時代	竪穴状の窪み 665か所 ※文献資料による。	なし	重要遺跡確認調査報告書 第10集

II 岩内町東山1遺跡の調査

1 調査の概要

(1) 調査要項

調査の名称 重要遺跡確認調査

調査受託者 北海道立埋蔵文化財センター指定管理者公益財団法人北海道埋蔵文化財センター

調査対象遺跡 岩内町東山1遺跡（埋蔵文化財包蔵地登載番号D-13-01）

道指定史跡 岩内町 岩内東山円筒文化遺跡（東山1遺跡の範囲内）

所在地 岩内町東山2-1・31・34、9、10、13-1・2・4・8、14-1・17~20、15、16-1~4、
23-2・8~14、29-2番地

(発掘調査)

調査対象 岩内町東山15番地、16-1・2番地

調査期間 平成26年10月28日（火）から11月12日（水）まで

調査面積 600m²（対象範囲面積5606.8m²のうち）

(2) 調査の経緯

本遺跡における調査は、昭和31年、32年に大場利夫、桐井力蔵を担当者とする岩内町教育委員会（以下、町教委）によって行われたものが最初である、昭和29年の岩内大火の後、東山地区に迫った急速な市街化に伴い、遺跡が失われることを危惧した桐井力蔵ら町の郷土研究者たちによって手がけられたものとされる。この成果は昭和33年9月に報告書「岩内遺跡」にまとめられ、この遺跡が注目される契機となった。これを受けて昭和43年に遺跡は「岩内東山円筒文化遺跡」として道指定史跡に、出土した遺物は「岩内東山円筒文化遺跡出土の遺物」として道の有形文化財に指定された。

その後、史跡を範囲に含めた東山1遺跡として町道の改良や東山団地の除却工事、斎場建設などに伴う調査により、遺跡の様相が少しずつ明らかになってきた。特に平成13~15年度に町道改良工事に伴って行われた町教委による発掘調査は、まさに遺跡の中心を貫くトレーナーであり、集落跡、墓域、盛土遺構（報告では捨場遺構と呼称）の存在を明らかにした。

本調査の範囲は、東山団地内にあたる包蔵地範囲内で、老朽化した木造平屋の建物が取り除かれて、更地になった状態の東山15、16-1・2番地の一部に当たる。先に挙げた町教委による調査の調査区に隣接し、遺跡の保存も良好と想定されていたことから、町教委の要請もあり、史跡範囲の編入を視野に入れた重要遺跡確認調査が行われることとなった。

(3) 調査体制

北海道立埋蔵文化財センター指定管理者 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター

理事長 坂本 均

副理事長 畑 宏明（平成26年8月28日死去）

事務局長 中田 仁

常務理事 千葉 英一（第1調査部長兼任）

普及活用課	課長 鎌田 望（発掘担当者）
	主査 藤井 浩（発掘担当者）
第1調査課	主査 吉田裕吏洋

(4) 調査の経過

i 発掘調査

平成26～29年度重要遺跡確認調査実施要領の通知後、道教委との打ち合わせにより、東山1遺跡内の東山15、16-1・2番地の調査を優先して行うこととなった。平成26年7月10日（木）に岩内町教育委員会において道教委、町教委担当者とともに現地確認を併せた打ち合わせを行った。この時点では15、16-1・2番地を今年度の調査地とすることは確認できたが、現時点で土地の取用が出来ておらず、調査は町有地化が確実になる10月以降となることが明らかになった。

その後、町教委から16-1・2番地についての今年度調査は難しいとの要請があり、道教委との協議で、16-1・2番地においては2日間で調査を行うことで調整がなされた。具体的な調査計画は土地の町有化が確定した9月に決定した。

本調査は10月28日（火）に着手した。最大で3名の調査員と4名の作業員により、足掛け3週間、延べ11日間にわたって作業を行い、11月12日（水）に現地での作業を終了した。調査初日の10月28日と29日には重機による表土除去を行い、最終日の11月12日（水）には重機により埋戻しを行った。

特に、東山16-1・2地区については調査初日に重機により表土除去を行った後、直ちに人力により精査を行った。翌日にはトレンチ調査を開始し、同日の内に実測及び写真撮影後、重機により埋戻した。

調査は時期的に、雪、雹、強風などの悪天候が続き、作業は困難を極めたが、休止することなく進めることができた。また、作業期間中は東山保育園において水、電気の借用、岩内地域人材開発センターにおいてはトイレの借用という協力も得られた。

調査期間中の11月4日（火）には道教委文化財・博物館課の中田裕香主任、北海道大学小杉康教授より現地指導を受けた。

発掘調査後には調査部分すべての埋戻し、現状復旧を行った。各発掘区及びトレンチ部分も含めて、土嚢袋を用いて底面及び壁面の養生を行った。特に地表面付近の埋戻しはもとの表土を用いて行い、景観に配慮した。

出土した遺物の整理作業は、発掘調査終了後、道立埋蔵文化財センターにて直ちに行われた。コンテナ（59×39×15cm）にして16箱に及ぶ遺物を土器、石器ごとに分類して再収納したうえで、水洗作業を開始した。注記作業及び二次整理については今年度末より開始の予定である。

ii 関連資料調査

関連資料については、町教委担当者を通じて町役場住民課から東山墓地設置の経緯などの資料を得ることができた。今年度末には町教委所蔵の道指定有形文化財「岩内東山円筒文化遺跡出土の遺物」の所在確認を行い、次年度には借用の上、資料化を行う予定である。

2 遺跡の位置と環境

東山1遺跡は岩内町東山地区に所在する。岩内町は積丹半島の西側の付け根部分にあたる、北を日本海に面し、南はニセコ連峰の岩内岳を望む。北、東に共和町、南には蘭越町と接する。

東山地区は岩内町市街地にあたり、中心地区から東に約500mに位置する。現況は東山団地をはじめとする住宅街であり、遺跡内には東山墓地も含まれる。



図 II-1 遺跡の位置（国土地理院地形図「岩内」（1:25000）より作成したものである）

遺跡周辺の地形は、市街地のほとんどが海岸平野に立地するのに対し、標高約30mの海岸段丘上にあたり、北側に接する海岸平野との比高差は25mである。この海岸段丘は市街地中心部の（高台地区）を西端とし、東山地区を経て、その北東に位置する共和町の梨野舞納地区に至る、全長約5kmである。海岸段丘の南側は野束川の支流であるポンイワナイ川に面した河岸段丘となっている。

(周辺遺跡の分布 図II-1)

東山1遺跡をはじめとする岩内町内の遺跡については、埋蔵文化財包蔵地として平成26年度現在、13か所が確認されている。そのほとんどが東山1遺跡の立地する海岸段丘上で、高台地区にある全修寺遺跡を西端に、東山2遺跡、本遺跡、東山5遺跡、共和町に入りて梨野舞納段丘3遺跡、梨野舞納段丘1遺跡、梨野舞納段丘3遺跡、上リヤムナイ遺跡の順に立地する。

そのほかの町内の遺跡はポンイワナイ川の右岸、河岸段丘上に立地するものがほとんどで、高台1遺跡、高台2遺跡、栄1遺跡、栄2遺跡、栄3遺跡、東山3遺跡、東山4遺跡が挙げられる。海岸砂丘上には大浜遺跡1か所のみと、野束川の支流に面した河岸段丘上にある島野遺跡が挙げられる。

(遺跡範囲内の現況 図II-2)

遺跡範囲内の現況は、北東部分に道指定史跡の岩内東山円筒文化遺跡があり、これを含めて遺跡の北西半分は東山墓地となっている。東山墓地は明治23年におこった岩内町での大火後、火葬場のあつた東山地区の周辺に各町内の寺が墓を移したことから始まるといわれる。昭和29年の「岩内大火」として知られる大規模な火災により、墓地を管理していた地蔵堂(のちに阿弥陀本願寺に改名)も焼失し、その後町の管理となって現在に至っている。地形は北側に向かって緩やかに傾斜し、海岸平野との境界に当たっては急崖となっている。

こうした北西側に対して南東半分は東山団地及び東山公園となっている。東山団地は岩内大火の後、罹災者の住宅確保と過密化していた市街の疎開を目的として、土地区画整理の後に建設された公営住宅の一つである。住宅地化が進み、本来の地形が見えにくくなっているが、北東側の標高29mを頂点に、南から南西方向に向けて標高25mまで緩やかに下る緩斜面であることがうかがえる。包蔵地の範囲は墓地から団地、公園にまで広がっている。

また、包蔵地内南西端には昭和32年町教委調査第2地点とされる場所があり、町有地として保護され、昭和47年町教委作成の「東山遺跡発掘由来」が設置されている。

3 発掘調査

(1) 調査の方法

i 調査範囲

調査対象が東山15、東山16-1・2番地と決まり(以降、東山15区、東山16-1・2区とする)、その調査範囲、面積を、対象地区の総面積5,606.8m²の1割程度を基準に設定することになった。遺構確認を目的としたグリッド調査区を発掘区として対象範囲全体に14か所設定した。5×10mのグリッド調査区を10か所、5×5mのグリッド調査区を4か所、公共座標に従い配置した。配置に際しては等間隔になるよう配慮したが、調査対象区内の地形変化なども考慮して、変則になった個所もある。

ii 発掘調査

発掘調査は、各グリッド調査区(発掘区1~14)について、重機により表土から遺構を確認できる面までを掘り下げた。確認面は各発掘区により異なったが、黒色シルト質土層(I層)から暗褐色土層(III層)中(基本土層の項を参照)まで掘り下げたところで確認することができた。

遺構確認面以下は人力によりこれを精査し、遺構の確認を行った後、1m幅のトレーニングを設定し、



図 II-2 平成26年度調査区設定図

基盤とした黄色粘土層までを掘り下げた。トレーニングは15区内では南北に長く延びる方向で、16-1・2地区では調査時間の制約により、長さの短い東西方向で設定し、掘り下げた。

遺物の採取は、重機による調査及び遺構確認面の精査においては、5m角の大グリッド毎に取り上げ、トレーニング調査においては、1m角の小グリッド毎に、層位別に取り上げた。また、遺構との関係性が強いと思われる石組を構成する礫や一括土器の一部などは記録するにとどめ、現地保存とした。

iii 基本土層

基本土層については、これまでの調査結果と今回の観察に基づいて表土を0層、表土下の黒色シルト質土をI層(層厚約10cm)、黒褐色粘土をII層(層厚10~25cm)、暗褐色粘土をIII層(層厚10~20cm)、V層への漸移層に当たる明褐色粘土をIV層(層厚5~10cm)、基盤土に当たる黄褐色粘土をV層とした。主な遺物包含層はII、III層である。また、団地造成及び除却時に搅乱されたと思われる表土については「削平土」と表現した。

iv 測量と記録

測量 測量作業については基準点測量を(株)シン技術コンサルに委託して実施した。この測量作業により平面直角座標系(世界測地系)に基づいた遺跡の現況平面図(1/1000)を作成した。基準点はGPS測量にて座標値を確定し、現地にH26T1(X=-112861.259 Y=22661.060)、H26T2(X=-112857.229 Y=22577.095)の2点を設けた(平面直角座標系X I系)。

水準点は一等水準点(交25)からの直接水準測量を行った。現地にH24T1(H=27.786)、H24T2(H=27.190)の水準点を設置することが出来た(4級水準測量)。

また、調査範囲内に発掘調査のための測量基準杭を3か所設置した。X=-112840とY=22570との交点、X=-112840とY=22620の交点、X=-112830とY=22560の交点である。

掘削の範囲や出土遺構、遺物の位置などは(株)シン技術コンサルよりトータルステーションシステム及び遺跡管理システムを借用し、自ら実測、作図を行った。これらのシステムで作成したデータをイラストレーターのデータに変換して、手実測によるものとも合わせて新たに作図を行った。

野外撮影 現地撮影は6×7判のカメラを主体にし、4×5判のカメラとデジタルカメラを用いた。

出土品の収集 出土品については発掘区、トレーニングなどの調査区毎に取り上げて収集した。発掘区では5m角の大グリッド、発掘区のトレーニングにおいては1m角の小グリッドでそれぞれのグリッド毎に座標を冠した名称を付した。平面直角座標系第X I系の座標を基準に、X座標の下2桁、Y座標の下3桁を用いてグリッドの名称とした。また、遺物が集中して出土した11区や1区の一部についてのみ番号をつけて取り上げている。

v 資料整理

図面等 現地で作成した図面(原図)については、図番号を付して図面台帳を作成し、管理している。原図はスキャナーで取り込み、illustrator CS4などのソフトを用いて、主題ごとに素図を作成した。報告書などの図版作成にあたっては、素図を基にillustrator CS4を用いて版下作成を行った。

出土品 調査後に水洗、風乾し、遺物カードを作成して、ポリ袋に収納した。今年度においては整理作業が途中のため、注記の方法などについては次年度に報告する。

写真 現地で撮影したフィルム、データについてはアルバムを作成し、撮影台帳とともに保管している。今年度は遺物の撮影を行っていない。

II 岩内町東山1遺跡の調査

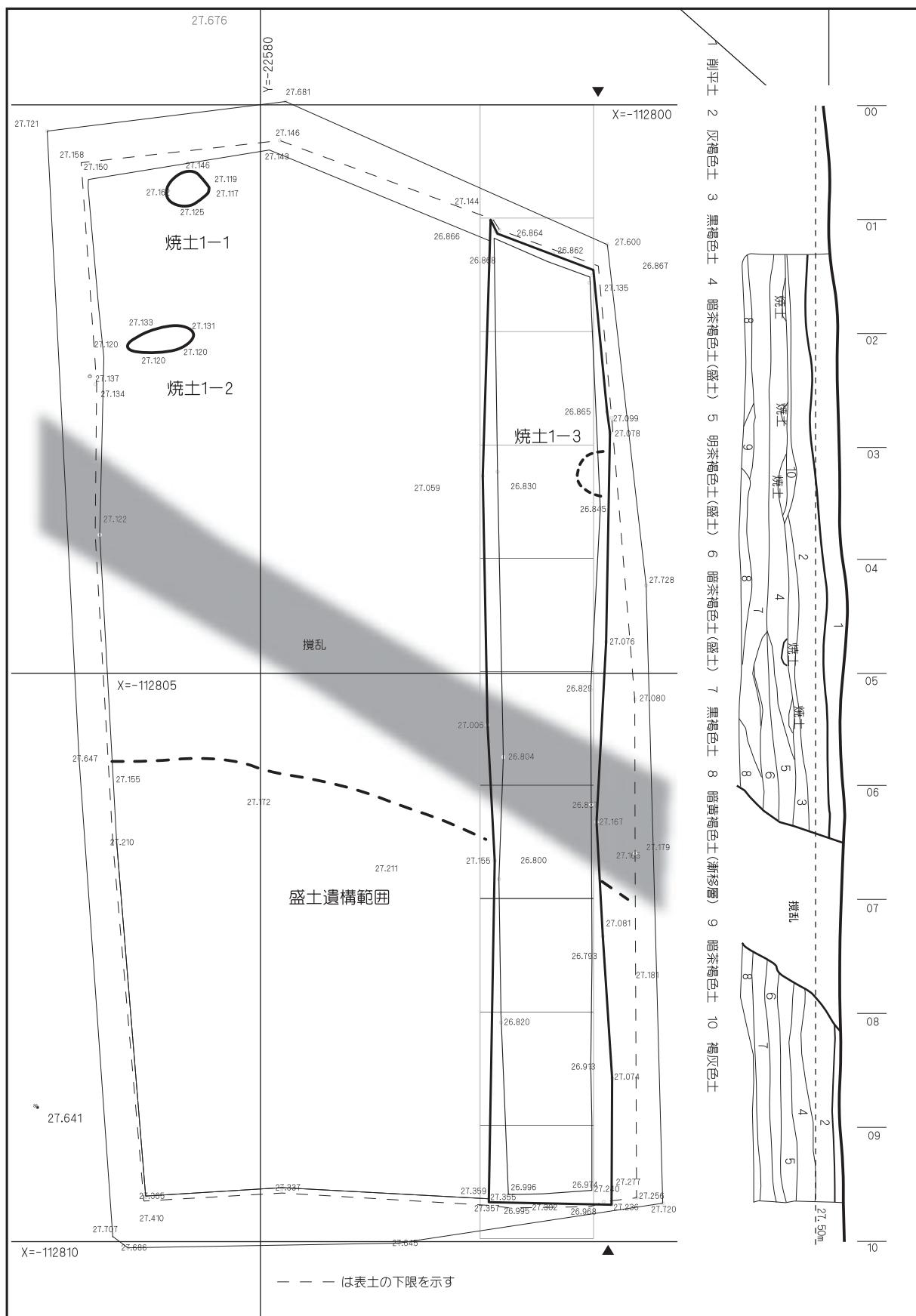


図 II-3 発掘区 1

(2) 各発掘区（グリッド及びトレント調査）の状況

i 東山15区（3,485.95m²）

発掘区1（図II-3 写真図版II-7 X=-112800~-112810 Y=22579~22583）

本区は東山15区の中で最も北に位置する発掘区である。地表面での標高は約27.6~27.7mを測り、ほぼ平坦である。計画当初は1m西に位置していたが、街路に伴なう側溝を避けて現位置となった。

重機では5m×10mの南北に長い長方形を掘り下げたが、表土に含まれる配管や基礎破片などの状況によりやや不整形となった。地表面から約50cm掘り下げたところ、発掘区の南半分で土器や石器片、焼土粒を多く含む茶褐色土を確認した。北半分ではこれを確認できなかったため、さらに10cmを掘り下げ、黒褐色土層の上面を確認した。確認面は北に向かって緩やかに下がる斜面となった。この面を人力で精査したところ、南側の茶褐色土層面では多くの遺物を確認し、北側の黒褐色土層面では2か所の焼土堆積を確認した。また、東壁面においてもほぼ同じ層位で2か所の焼土堆積を確認した。

焼土については1-1が直径50cmの円形、1-2が長軸60cmを測る楕円形で。いずれも赤褐色土を主体とし、ほかに混入の少ない堆積である。1-3は直径30cmほどでⅡ層（黒褐色土層）直上で見られた。大半は東壁面の東側に延びている。

人力によるトレントの掘り下げは、発掘区東壁から1mの幅で行った。Y=22582~22583のラインに相当する。約30~40cmを掘り下げて基底に当たる黄色粘土層を確認した。黄色粘土層の上面は概ね平坦である。

土層断面は東壁面のY=22583ラインで観察し、記録した。この土層から、発掘区南半分でⅡ層（黒褐色土層）中に盛土遺構と思われる堆積を見ることができた。焼土、炭化物、黄色粘土粒子などを多く含む暗~明茶褐色土の堆積で二次堆積のものであることが明らかであった。この堆積は最も厚いところで約30cmで、一部では上層の暗茶褐色土と下層の明茶褐色土とに分層することもできた。

盛土遺構の境界は、発掘区の中央を東西に横切るように見られ、遺構確認面上では明褐色土と黒褐色土の違いとして明瞭にとらえることができた。

発掘区2（図II-4 写真図版II-8 X=-112825~-112835 Y=22560~22565）

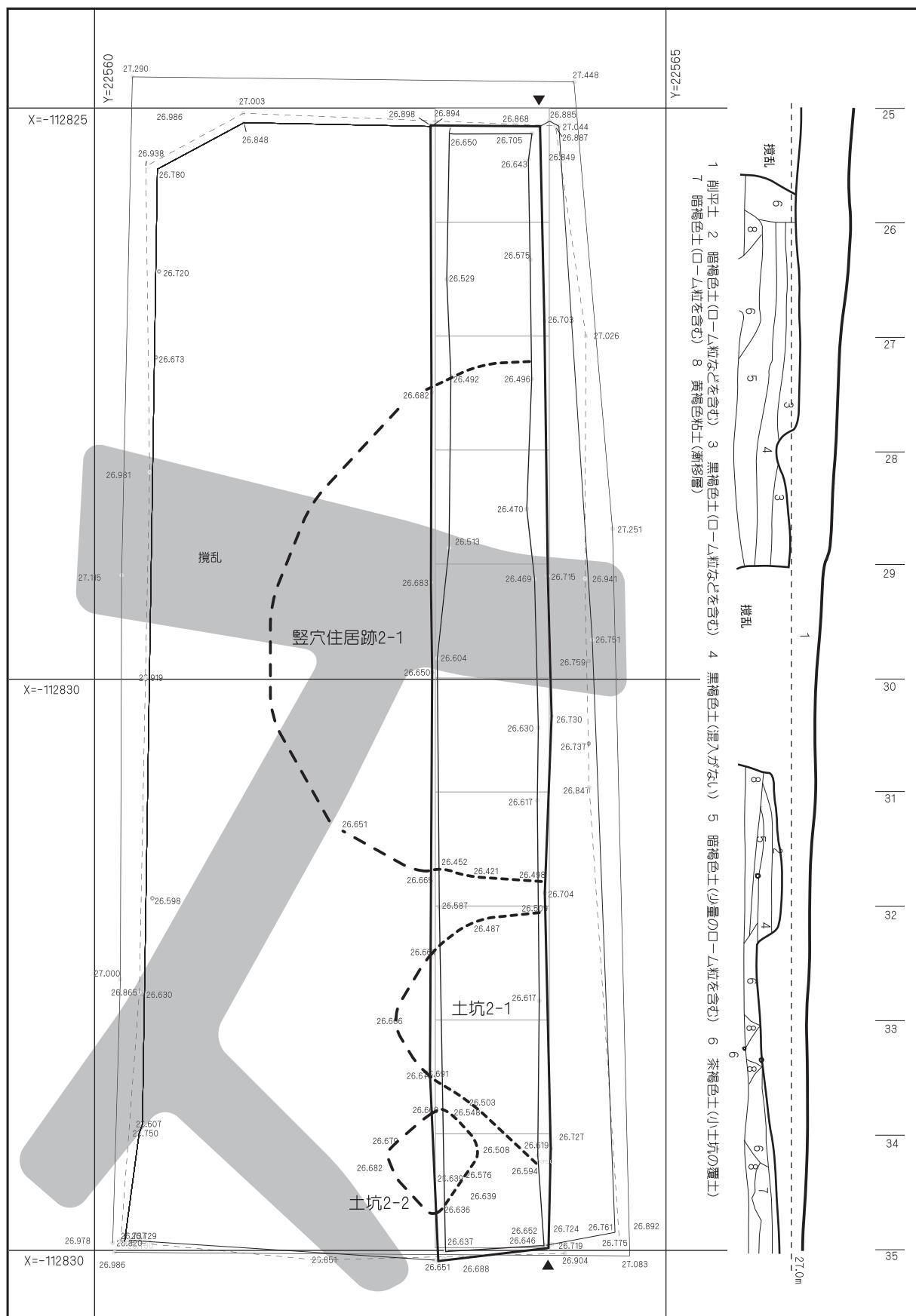
本区は東山15区の中で西側に位置する発掘区である。地表面での標高は約27.0~27.4mを測り、やや南側に向かって下がる。ほぼ当初の予定通りの位置で掘り下げることができたが、配管と思われる搅乱が見られたため、一部不整形となった。

重機では5m×10mの南北に長い長方形を掘り下げたが、発掘区内においても数本の配管跡と思われる搅乱が認められた。地表面から約50cm掘り下げたところ、部分的にⅡ層（黒褐色土）が残っていたが、大部分で搅乱された土が厚く堆積している。Ⅲ層（暗褐色土）上面まで掘り下げて、この面を人力で精査したところ、直径5mほどの竪穴と直径2mの土坑、直径1mの土坑を確認した。

人力によるトレントの掘り下げは、発掘区東壁から少し離れた1mの幅で行った。Y=22563~22564のラインに相当する。約30~40cmを掘り下げて基底に当たる黄色粘土層を確認した。黄色粘土層においての確認で、上記3か所の遺構がより明確になった。

竪穴住居跡2-1は直径5mで、西半分のみを確認した。土坑2-1は直径2mで、黒褐色土を覆土とし、西半分のみを確認した。土坑2-2は黒褐色土を覆土として、隅丸方形のその全体を確認することができた。

土層断面は東壁面のY=22564ラインで観察し、記録した。この土層の観察により、搅乱によって失われているところは大きいものの、各遺構の覆土及び掘り上げ土と思われる堆積の一部も確認することができた。基底に当たる黄褐色土層面は平坦であった。



図II-4 発掘区2

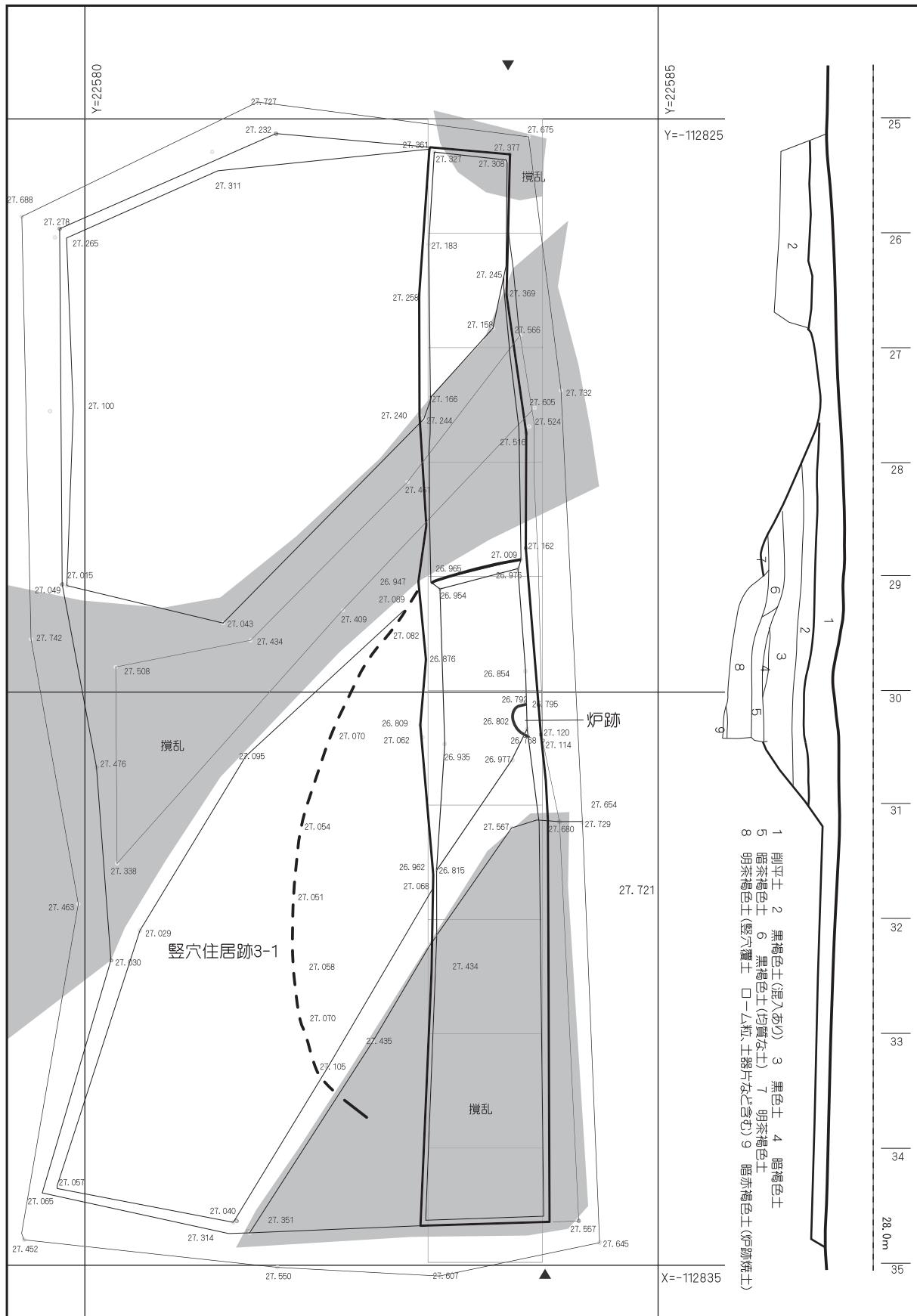


図 II-5 発掘区 3

発掘区3（図II-5 写真図版II-9 X=-112825～-112835 Y=22580～22585）

本区は東山15区の中ではほぼ中央部に位置する発掘区である。地表面では標高約27.5～27.8mを測り、やや南側に向かって下がる。ほぼ当初の予定通りの位置で掘り下げることができたが、当初から明らかになっていた水道管の位置に当たり、重機による掘り下げは配管と配管の間のごく一部となった。それに伴い大きく不整形となった。

重機では5m×10mの南北に長い長方形を掘り下げたが、水道管2本と大きな搅乱を確認し、水道管については10cmほど掘り下げて残すこととした。わずかに掘り下げられた範囲ではⅡ層（黒褐色土層）を確認することができた。人力でⅢ層（暗褐色土）上面まで掘り下げて精査したがこの時点では遺構の確認ができなかった。

人力によるトレーナーの掘り下げは、発掘区東壁から少し離れた1mの幅で行った。Y=22683～22684のラインに相当する。約30～40cmを掘り下げて基底に当たる黄色粘土層を確認した。この面で発掘区中央壁際に遺構と思われる堆積を確認した。掘り下げたところ、灰褐色土を覆土として黄色粘土層を掘り込んでつくられ、その一部には炉と思われる焼土が見つかったことから、竪穴住居跡3-1とした。あらためて周辺の確認面を精査したところ、竪穴住居跡と思われる輪郭を確認することができた。竪穴住居跡3-1は直径約5mの円形で、確認できたのは西半分のごく一部であった。炉跡と思われる焼土は床面上で確認され、暗赤褐色を呈する。

土層断面は東壁面のY=22584ラインで観察し、記録した。ほとんどが搅乱であり、黄色粘土の層面も断片的にしか把握できなかった。

発掘区4（図II-6 写真図版II-10 X=-112825～-112835 Y=22600～22605）

本区は東山15区の中でやや東寄りに位置する発掘区である。地表面での標高は約27.8～27.9mを測り、ほぼ平坦である。ほぼ当初の予定通りの位置で掘り下げることができた。

重機では5m×10mの南北に長い長方形を掘り下げた。地表面から約50cmのところで、Ⅱ層（黒褐色土層）の上面を確認した。特に大きな変化が見られなかっただけ、さらに10cm程掘り下げて、Ⅲ層（褐色土層）上面を確認した。この面を人力で精査したところ、発掘区の西半分を占め、黒褐色土を覆土とする大型の遺構の輪郭線の一部を確認することができた。この輪郭は南側で明瞭であるが、北側では不明瞭であった。

人力によるトレーナーの掘り下げは、発掘区西壁から1mの幅で行った。Y=22600～22601のラインに相当する。南端では約30cmを掘り下げて基底に当たる黄色粘土層を確認したが、先に確認した輪郭の内側ではさらに50cmほど掘り下げてようやく黄色粘土層を確認することができた。

土層断面は東壁面のY=22600ラインで観察し、記録した。この土層の観察により、先に確認された遺構の輪郭が黄色粘土層を大きく掘り込んでつくられた竪穴住居跡4-1のものであることが明らかになった。竪穴住居跡の覆土上には盛土状の堆積も見られたため、竪穴住居が埋められて後に盛土遺構が築かれた可能性も考えられた。竪穴は直径約6mの円形と思われる。

竪穴住居跡の覆土の堆積は複雑で、焼土や黄色粘土の堆積、暗茶褐色土と明茶褐色土が交互に堆積して縞状になるなど、人為的な堆積が各所で見られた。また、覆土の上面で1か所、床面で2か所大型の礫が出土した。石組を構成していた可能性も考えられる。住居跡の壁の立ち上がりは明瞭で、急な立ち上がりである。床面は住居跡の中心に向って緩やかに下る傾向が見られた。

発掘区内北東に見られた不明瞭な遺構の輪郭については、盛土状の堆積の延長、またはその影響によるものと思われる。また、この区内では土層断面の北側でもわずかに盛土状の堆積が確認された。

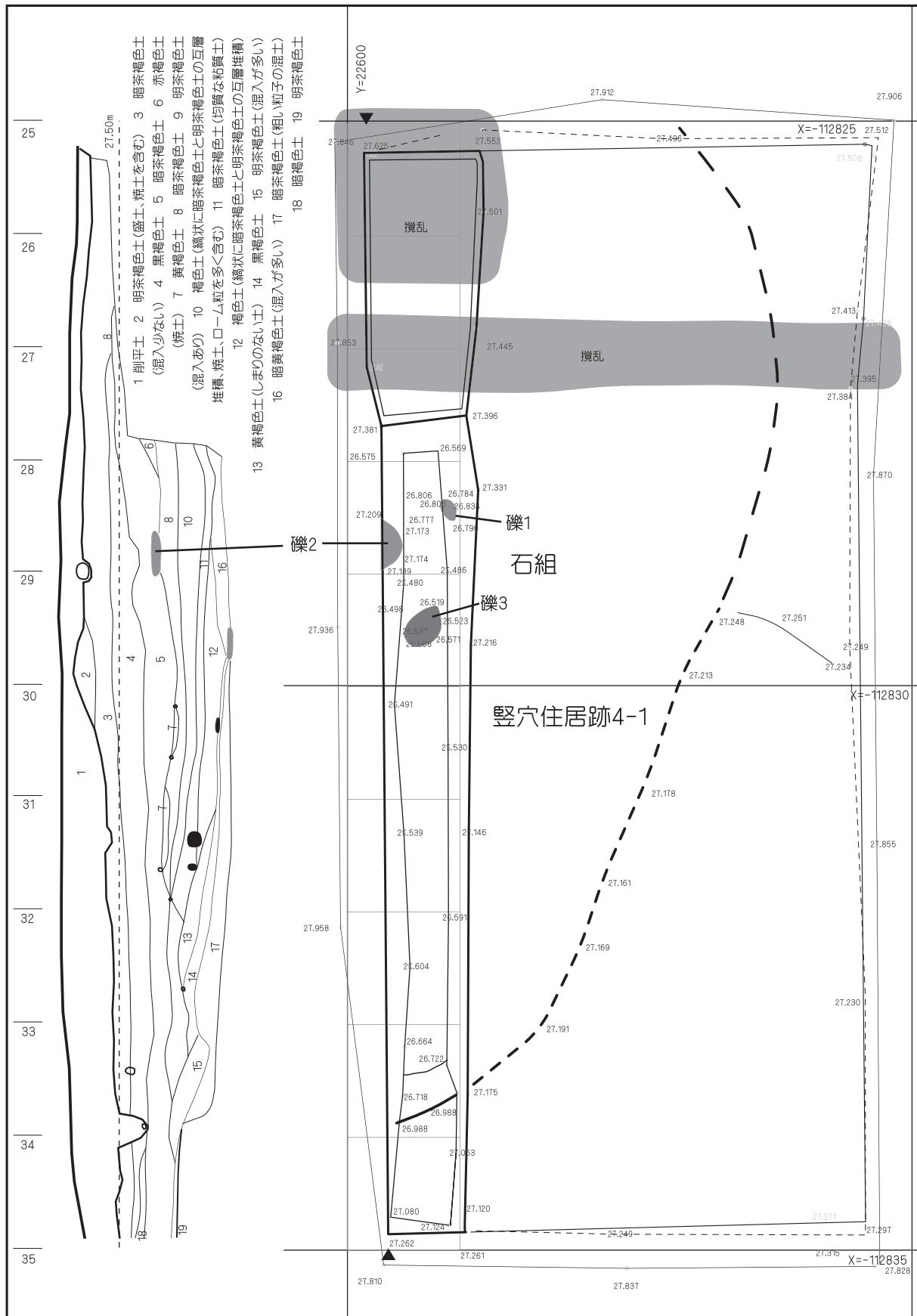


図 II-6 発掘区 4

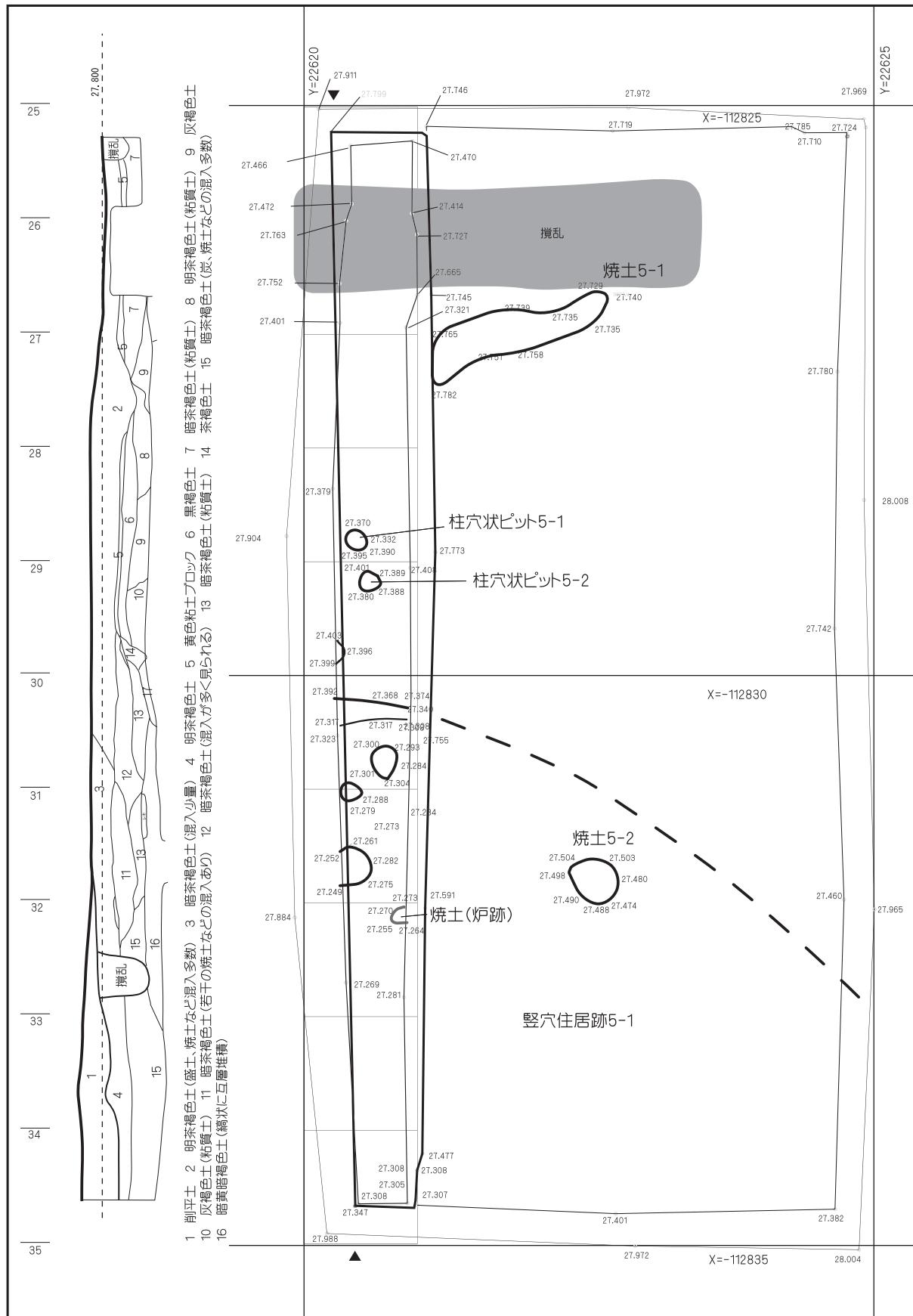


図 II-7 発掘区 5

発掘区5（図II-7 写真図版II-11 X=-112825～-112835 Y=22620～22625）

本区は東山15区の中で最も東側に位置する発掘区である。地表面での標高は27.9～28.0mを測り、ほぼ平坦である。ほぼ当初の予定通りの位置で掘り下げる事ができた。

重機では5m×10mの南北に長い長方形を掘り下げた。地表面から50cm程を掘り下げたところ、搅乱された表土の堆積はわずかで、特に北側において表面に焼土や炭化物などが多く混入した明茶褐色土を確認する事ができた。この堆積は盛土遺構のものと考えられた。南側においてはさらに10cmほど掘り下げて茶褐色土の面を確認したのち、人力で遺構確認面を精査した。

遺構確認面上では焼土2か所を確認した。北側の焼土5-1は不整形で、東西に2mほど細長く延びるような形で確認した。暗赤褐色の焼土が主で、盛土の堆積に伴う可能性が考えられる。南側の焼土5-2は直径50cmほどの円形で、暗茶褐色土上で確認された。

人力によるトレンチの掘り下げは、発掘区西壁から1mの幅で行った。Y=22620～22621のラインに相当する。北側では約40cmを掘り下げて基底に当たる黄色粘土層を確認し、南側では約50～60cmを掘り下げて黄色粘土層を確認した。トレンチ全体に土器、石器ともに遺物の出土が多く、特に南側では北海道式石冠や扁平打製石器などの礫石器の出土が見られた。また、トレンチの底面の黄色粘土層では柱穴状のピットが6か所、焼土が1か所確認された。

土層断面は西壁面のY=22620ラインで観察し、記録した。この土層の観察により、上層では北側から中央にかけて盛土の堆積が覆っていること、南側では緩やかな立ち上がりを介して竪穴住居跡5-1と思われる落ち込みがあることが確認された。その結果、トレンチ内で確認された焼土は炉跡の可能性が高く、また柱穴状のピットは柱穴ととらえることができた。さらにはトレンチ4と同様に竪穴住居跡が埋積された後に盛土の堆積が形成されたこともうかがえる。

トレンチ内の柱穴状ピットについては、竪穴住居に伴うものを除き、北側を柱穴状ピット5-1、南側を柱穴状ピット5-2とした。ともに覆土は暗茶褐色土で、直径30cmほどである。

竪穴住居跡については、全容をつかめてはいないが、直径が5m以上で、確認面上での輪郭も明瞭ではないが、円形であると思われる。その床面は壁から中心部に向かって緩やかに下り、壁際には柱穴と炉と考えられる焼土が見られる。竪穴住居跡の覆土の堆積は住居跡4-1のように深くはないが、複雑で焼土や炭化物の混入や縞状の堆積なども見られた。

発掘区6（図II-8 写真図版II-12 X=-112850～-112860 Y=22580～22585）

本区は東山15区の中で南西角に位置する発掘区である。地表面での標高は約27.3～27.5mを測り、南側に向かってやや下がる。ほぼ当初の予定通りの位置で掘り下げる事ができたが、街路の屈曲部分付近で約1m離して掘り下げたため、一部不整形となった。

重機では5m×10mの南北に長い長方形を掘り下げたが、地表面から約30cm掘り下げたところで茶褐色土層を確認した。削平などが進んだためか、北側の発掘区と比較して、南側の6, 7, 8区においては各層の堆積が薄い。褐色土の面を人力で精査したところ、直径80cmほどの土坑6-1と焼土2か所を確認した。焼土は北側を6-1、南側を6-2とした。6-1は直径50cmの不整円形、6-2は長軸50cmの楕円形である。いずれも赤褐色の焼土である。

人力によるトレンチの掘り下げは、発掘区東壁から1m離れて、1mの幅で行った。Y=22583～22584のラインに相当する。10cmを掘り下げる程度で黄色粘土層に至り、この面で土坑6-1の輪郭が明瞭になった。

土層断面はトレンチ西壁面側のY=22583ラインで観察し、記録した。地表面からの層厚が最大でも30cmで、ほぼ表土で占められており、10cmほどの暗褐色土を確認したのみである。トレンチ内の黄

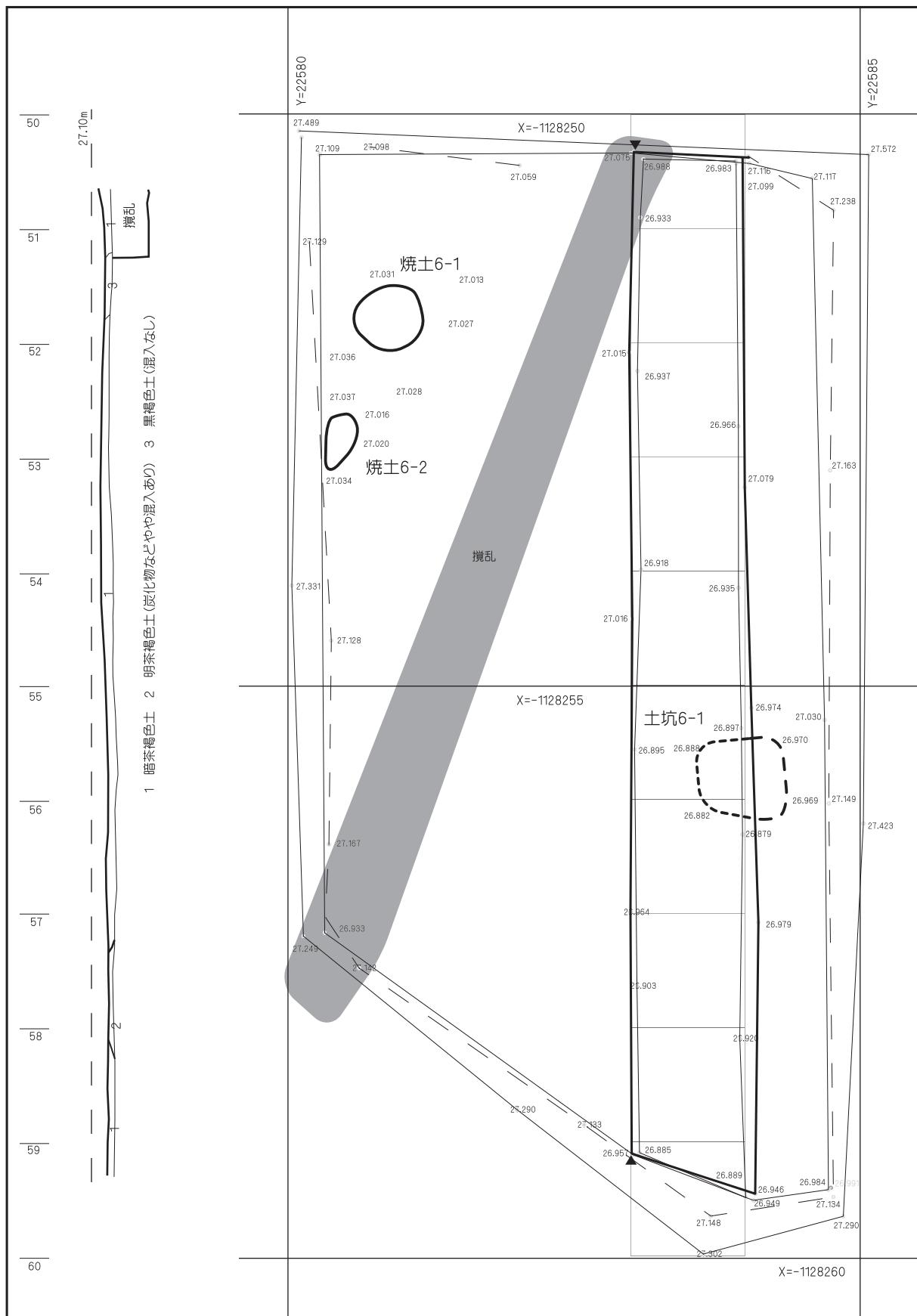


図 II-8 発掘区 6

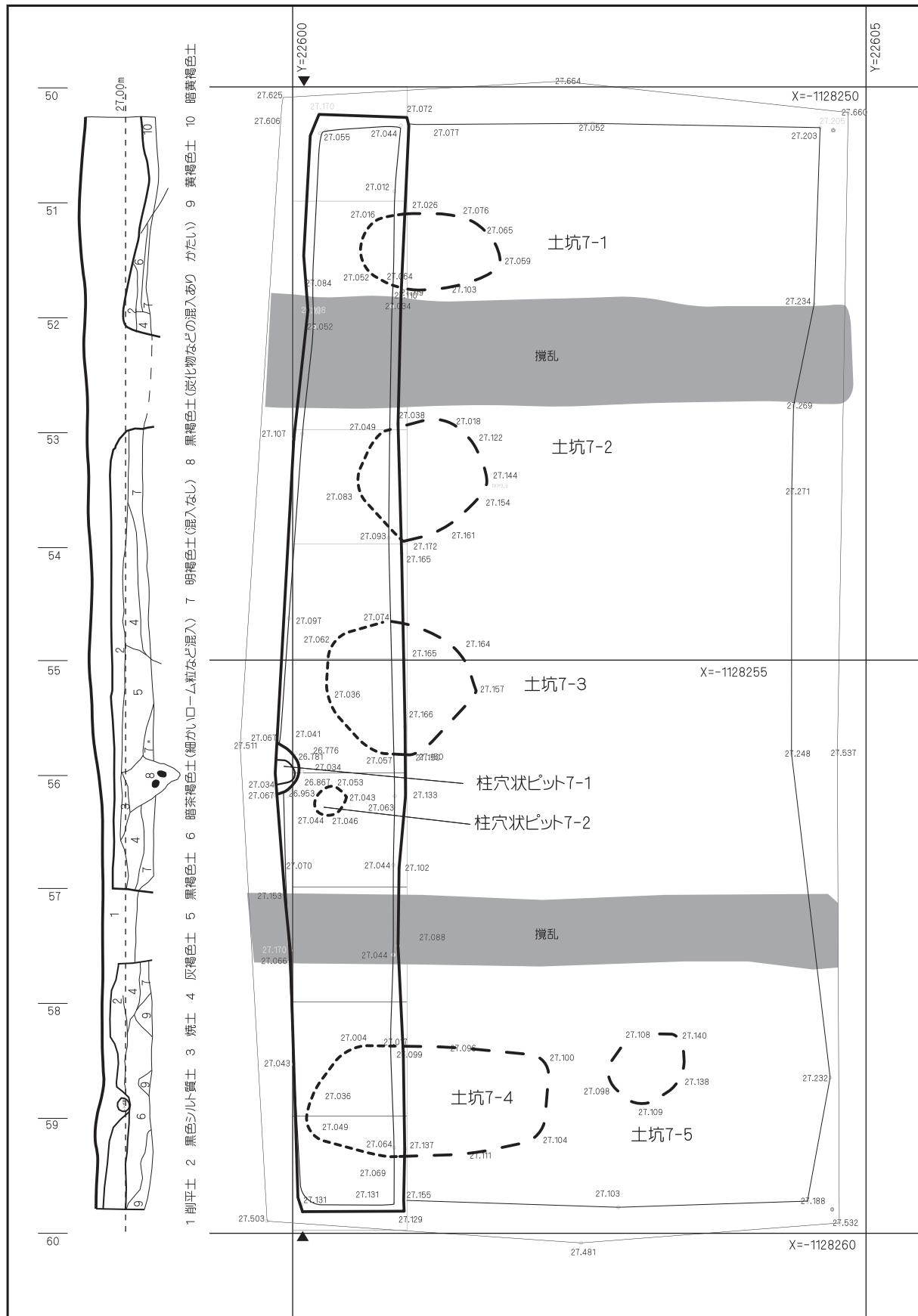


図 II-9 発掘区 7

色粘土層もほぼ平坦である。

発掘区7（図II-9 写真図版II-13 X=-112850~-112860 Y=22600~22605）

本区は東山15区の中で南東寄りに位置する発掘区である。地表面での標高は約27.5~27.6mを測り、わずかに南側に向かって下がる。ほぼ当初の予定通りの位置で掘り下げることができた。

重機では5m×10mの南北に長い長方形を掘り下げたが、地表面から約40cm掘り下げたところでI層（黒色シルト質土層）を確認した。層面を人力で精査し、褐色土が見えたところで、土坑5か所、柱穴状ピット2か所を確認することができた。

人力によるトレーニチの掘り下げは、発掘区西壁から1mの幅で行った。Y=22600~22601のラインに相当する。10cmを掘り下げる程度で黄色粘土層に至り、この面で、4か所の土坑と2か所の柱穴状ピットの輪郭が明瞭になった。

土坑は北側から順に番号を付した。7-1は長軸1.2mの楕円形、7-2は直径1mの円形、7-3は直径1.2mの円形である。確認面の覆土は暗褐色土で混入は少ない。南側の7-4は長軸2m、短軸1mの楕円形で形状と規模からTピットの可能性が考えられる。覆土は灰褐色土である。Tピットはこれまでの周辺の試掘調査などでも出土している。7-5は土坑の中でも規模が小さく直径60cmの円形で、覆土は暗褐色土である。

柱穴状ピットは2か所ともにトレーニチ内で、土層壁面で確認した7-1のみ掘り下げて調査を行った。覆土は黒褐色土で混入などは認められなかった。底に向かって細くなり、覆土中からは円礫が3点ほど出土した。礫は遺構に伴うものと考え、現地にて保存した。黄色粘土層面からは20cmほどの掘り込みであるが、土層断面からは表土下から掘り込まれていることがうかがえた。7-2は7-1より小規模で直径20cmほどの円形である。

土層断面はトレーニチ西壁面側のY=22600ラインで観察し、記録した。基本層序として確認できるものは少なく、土坑やピットの覆土や掘り上げ土などで複雑な堆積となっている。

発掘区8（図II-10 写真図版II-14 X=-112850~-112860 Y=22620~22625）

本区は東山15区の中で南東角に位置する発掘区である。地表面での標高は約27.7~27.8mを測り、わずかに南西側に向かって下がる。ほぼ当初の予定通りの位置で掘り下げることができた。

重機では5m×10mの南北に長い長方形を掘り下げたが、地表面から約30cm掘り下げたところでIII層（暗褐色土）を確認した。層面を人力で精査したところで、土坑2か所、柱穴状ピット4か所を確認することができた。

人力によるトレーニチの掘り下げは、発掘区西壁から1mの幅で掘り下げた。Y=22620~22621のラインに相当する。10cmを掘り下げる程度で黄色粘土層に至り、この面で4か所の柱穴状ピットと1か所の土坑の輪郭がより明瞭になった。

土坑は北側から順に番号を付した。8-1は直径2mの円形、8-2は直径1.5mの円形である。確認面の覆土は灰褐色土で混入は少ない。

柱穴状ピットは4か所ともにトレーニチ内で確認された。輪郭は明瞭で、北から順に番号を付した。8-1は灰褐色土で、直径30cm、8-2は黒褐色土で、直径20cm、8-3は東半分のみの確認であるが、灰褐色土で直径は推定40cmと考えられる。8-4も北半分のみの確認であるが、黒褐色土の覆土で推定直径20cmである。

土層断面は発掘区西壁面側のY=22620ラインで観察し、記録した。表土の直下にIII層（暗褐色土）に由来する層を確認したことから、上層がすでに失われているものと考えられた。黄色粘土層面は北から南へと緩やかに下っている。

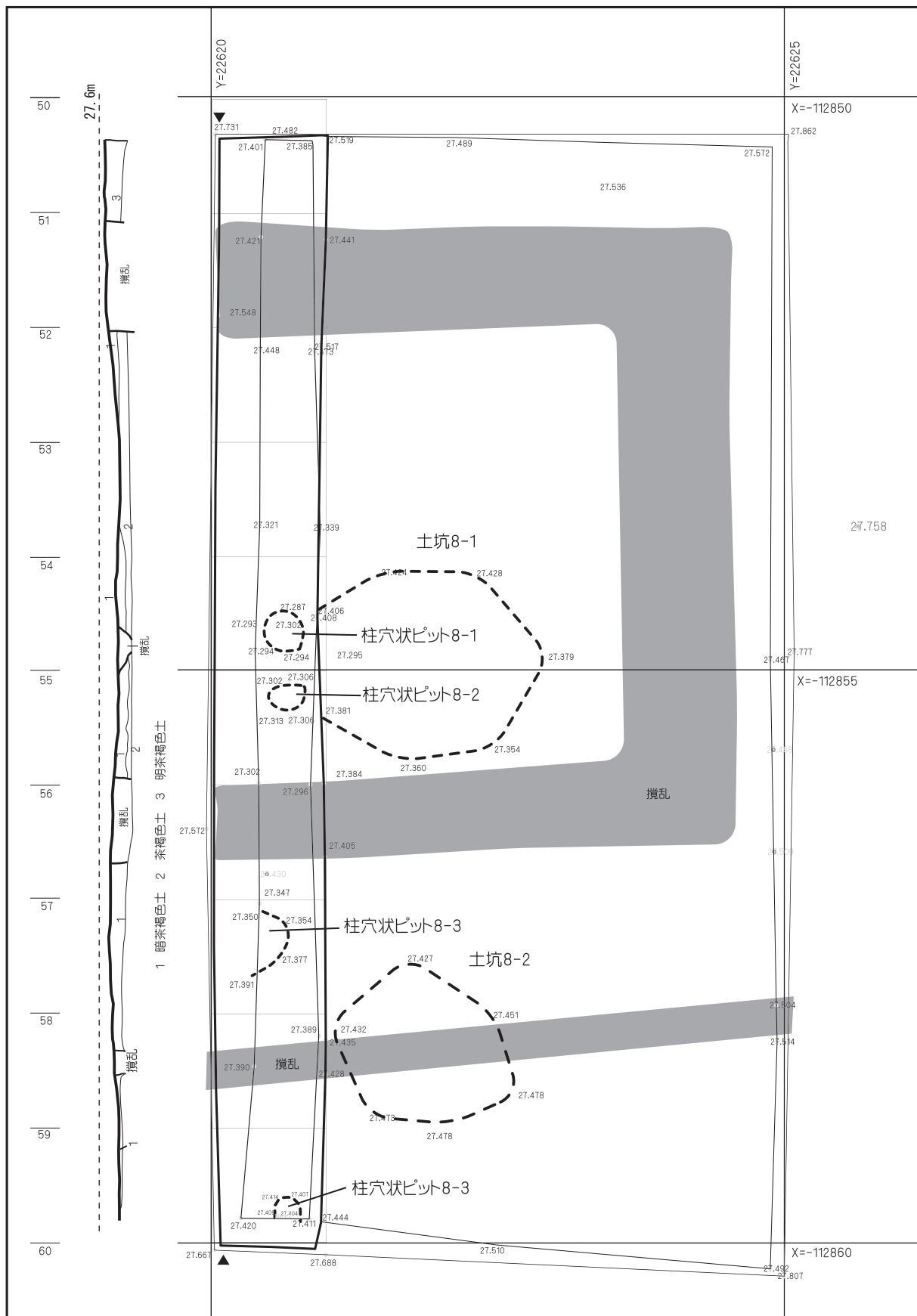
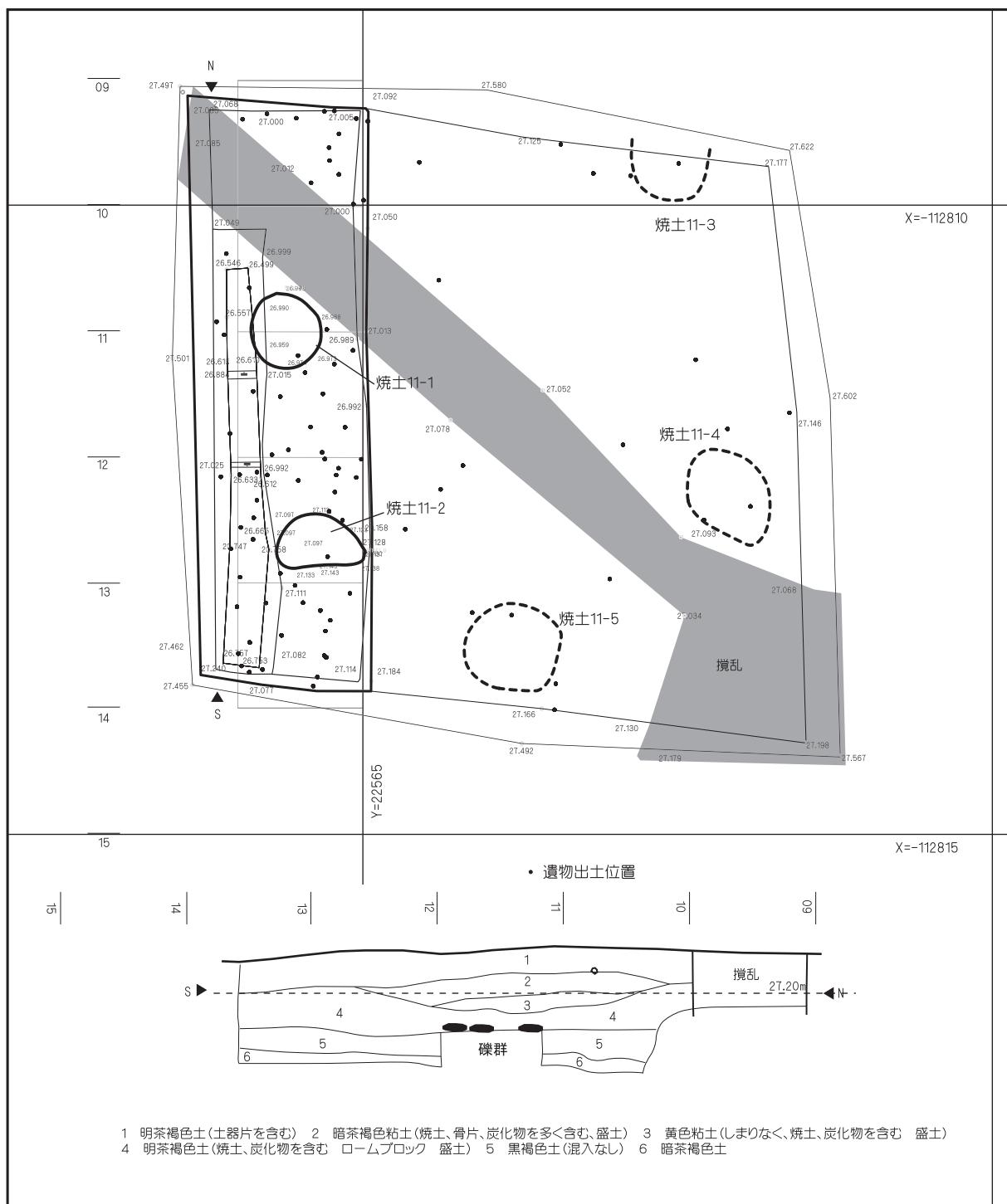


図 II-10 発掘区 8

発掘区11（図II-11 写真図版II-15、16、17-1 X=-112809～-112814 Y=22564～22569）

本区は東山15区の中で最も北西に位置する発掘区である。平成13～15年度に町教委が調査した調査区にも近接している。地表面での標高は約27.5～27.6mを測り、ほぼ平坦である。計画当初は4m西、1m南に設定していたが、街路に伴なう側溝を避けて現位置に設定した。

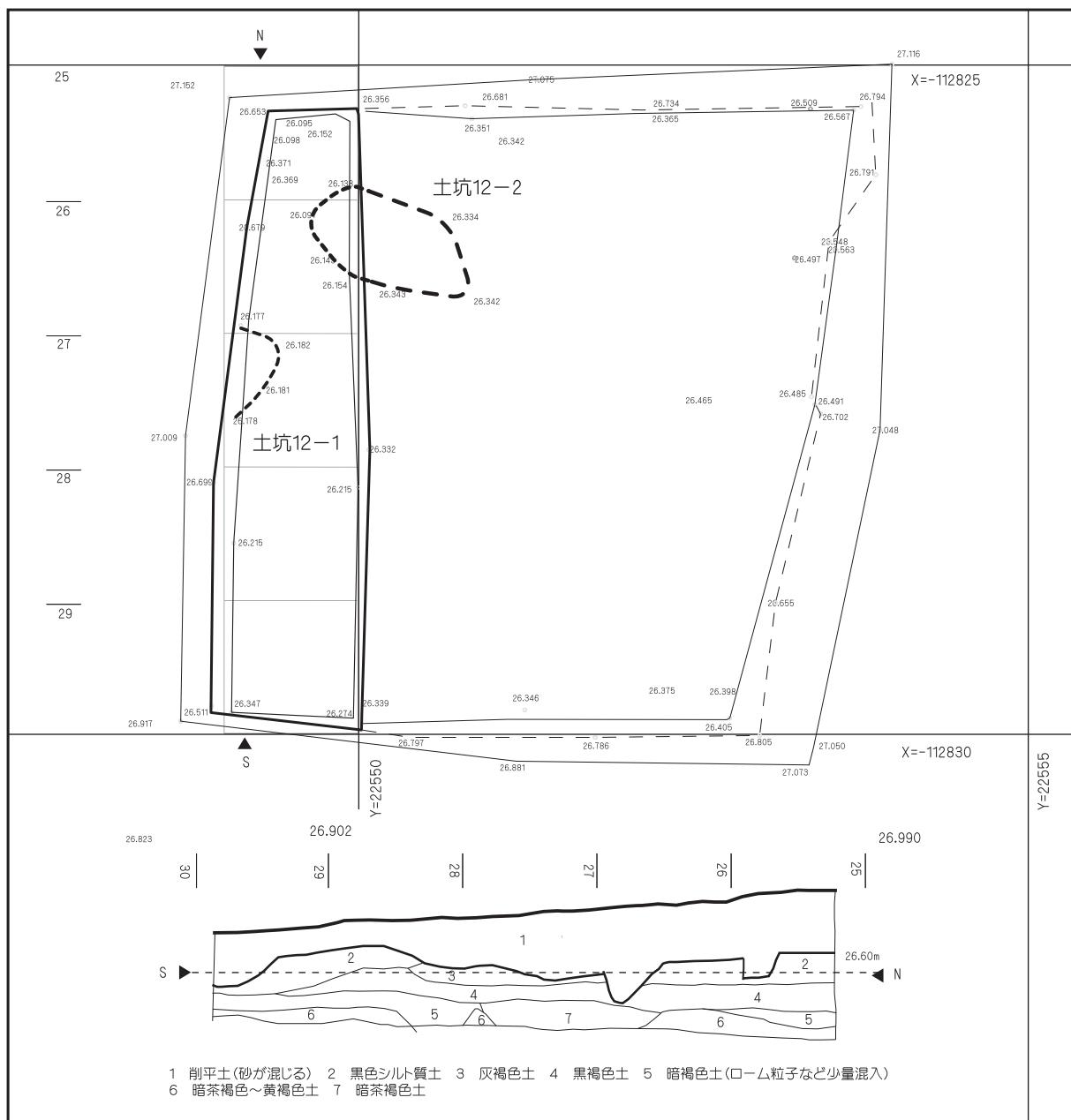
重機では5m×5mの正方形を掘り下げたが、表土に含まれる配管や基礎破片などの状況により不整形となった。地表面から約30cm掘り下げたところ、発掘区全体に土器、石器など遺物の出土が見られ、焼土や炭化物などが多く混入した褐色土の堆積を確認した。この面を人力で精査したところで、



盛土遺構と思われる堆積の上面であると判断した。遺物の取り上げを行わず、出土状況を記録した。精査を進めると一個体の土器や完形の石器などが出土し、保存状態の良さがうかがえた。

盛土に伴う遺構としては、大型の焼土5か所を確認した。その他にも焼土は数多く確認されたが、そのほとんどが焼土塊であり、輪郭範囲を捉えられないものであった。特に明瞭な焼土は北から焼土11-1、11-2とし、11-1が直径60cmの円形、11-2が長軸が60cmの橢円形である。いずれも茶褐色に近い赤褐色土で、再堆積されたものと考えられた。

人力によるトレーニングの掘り下げは、発掘区西壁から1mの幅で行った。Y=22564~22565のラインに相当する。遺物を残したまま約5cmを掘り下げ、さらに遺物が増える傾向にあったため、盛土遺構の層厚及び黄色粘土層までの堆積状況を確認するために50cm幅のサブトレーニングを設定した。中央部の石組部分を残して、これを黄色粘土層まで掘り下げたところ、途中、サブトレーニング北側、南側の2か所で黒曜石のフレイク・チップが集中して出土するなども見られた。



図II-12 発掘区12

土層断面はこのサブトレンチの西壁面、Y=22564ラインで観察し、記録した。この土層の観察により、上層部分が表土によって搅乱されているものの、30~40cmの層厚で盛土の堆積が残されていることが明らかになった。盛土はⅡ層（黒褐色土層）の上に形成され、Ⅱ層以下は黄色粘土層まで基本層序と同様の堆積が見られた。盛土の底部から黄色粘土層までは約30cmである。本区での盛土の堆積はオレンジがかかった黄色粘土ロームが多量に混入し、焼土や骨片などを巻き込むもので、発掘区1のように分層できる状態にはなかった。また、盛土中の遺物は、ほとんどが円筒下層式土器片で、北海道式石冠や扁平打製石器などの礫石器も見られた。

発掘区12（図II-12 写真図版II-17-2 X=-112825~-112830 Y=22549~22554）

本区は東山15地区の中で最も西寄りに位置する発掘区である。平成13~15年度に町教委が調査した調査区に最も近接している。計画当初は4m西に位置していたが、街路に伴なう側溝を避けて設定した。

重機では5m四方の正方形を掘り下げたが、表土に含まれる配管や基礎破片などの状況によりやや不整形となった。地表面から約50cm掘り下げたところで部分的にⅠ層を確認、さらに10cmを掘り下げて、Ⅱ層（黒褐色土）の上面を確認した。Ⅱ層の上面はほぼ平坦であるが、西側に向かって緩やかに下る傾斜が見られた。この面を人力で精査したところ、西側の2か所で、土坑を確認し、西側から土坑12-1、12-2とした。土坑12-1は長軸60cmほどの楕円形と推定され、発掘区西壁のさらに西に延びている。12-2は長軸1.2m、短軸0.6mの楕円形である。いずれも覆土は黒褐色土であり、輪郭は明瞭である。確認面において遺物の出土は疎らで少なく、西側に向かってやや多くなる傾向が見られた。

人力による掘り下げは、発掘区西壁から1mの幅で行った。Y=22549~22550のラインに相当する。約40~50cmを掘り下げて基底に当たる黄色粘土層を確認した。黄色粘土層の上面はほぼ平坦であるが、この面においての確認で、2か所の土坑の輪郭がより明瞭になった。

土層断面は発掘区の西壁、Y=22549ラインで観察し、記録した。平成15年度調査の「捨場遺構」に近接するにもかかわらず、その影響は全く見られない。地表面から黄色土層面までの層厚は最大で1mを測るが、その大半が表土である。表土直下にはⅠ層（黒色シルト質土）が部分的に残り、その下には基本層序通りの堆積が見られた。土坑の範囲においてのみ、その覆土と思われる茶褐色土の堆積が見られた。黄色粘土層の上面は平坦である。

ii 東山16-1・2区（16番地1 1,821.65m² 16番地2 299.20m²）

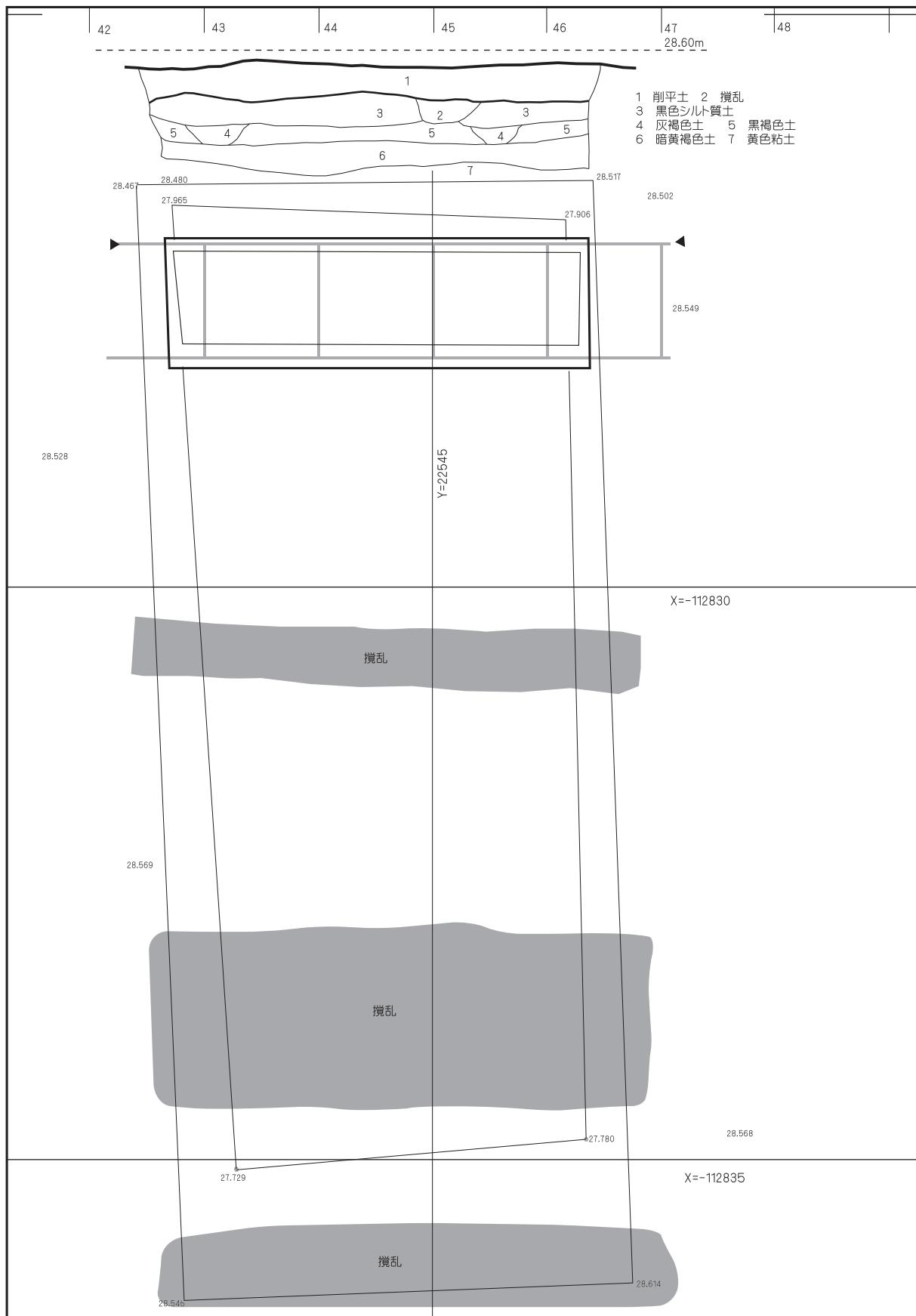
発掘区9（図II-13 写真図版II-18 X=-112826~-112836 Y=22642~22646）

本区は東山16-1・2区の中で北西に位置する発掘区である。地表面での標高は約28.5~28.6mを測り、わずかに南側に向かって高くなっている。街路及び側溝が近接したため、当初の計画位置から2m東、1m南に設定した。

重機では5m×10mの南北に長い長方形を掘り下げたが、地表面から約30cm掘り下げたところでⅢ層（暗褐色土）を確認した。層面を人力で精査したが遺構の確認には至らなかった。

人力によるトレーニチの掘り下げは、発掘区北壁から1mの幅で行った。X=-112827~-112828のラインに相当する。50cmを掘り下げて、黄色粘土層を確認することができたが、遺構の確認には至らなかった。

土層断面は発掘区北壁面側のX=-112827ラインで観察し、記録した。表土から黄色粘土層までの堆積は基本層序に準じたかたちで確認することができた。黄色粘土層面はほぼ平坦である。



図II-13 発掘区9

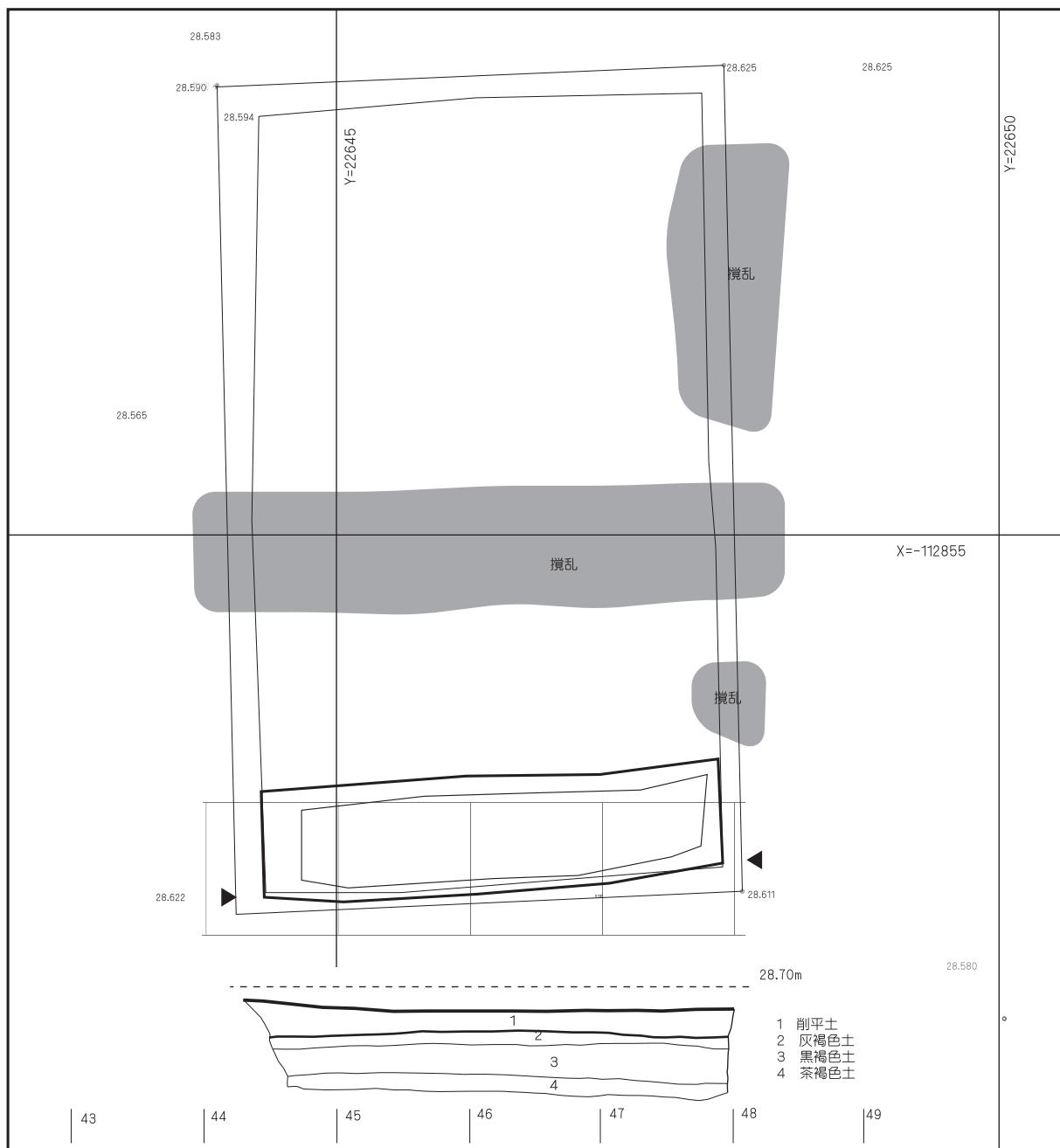
発掘区10（図II-14 写真図版II-19 X=-112851～-112858 Y=22644～22648）

本区は東山16-1・2区の中で南西に位置する発掘区である。地表面での標高は約28.6mを測り、ほぼ平坦である。街路及び側溝が近接したため、当初の計画位置から4m東、2m北に設定した。

重機では5m×10mの南北に長い長方形を掘り下げた。北側が大きく搅乱されていたが、地表面から約30cm掘り下げたところでⅢ層（暗褐色土）を確認した。層面を人力で精査したが遺構の確認には至らなかった。

人力によるトレーナーの掘り下げは、発掘区南壁から1mの幅で行った。X=-112857～-112858のラインに相当する。50cmを掘り下げて、黄色粘土層を確認したが、遺構の確認には至らなかった。

土層断面は発掘区北壁面側のX=-112858ラインで観察し、記録した。表土から黄色粘土層までの堆積は基本層序に準じたかたちで確認することができた。黄色粘土層面はほぼ平坦である。



図II-14 発掘区10

発掘区13 (図 II-15 写真図版 II-20 X=-112825~-112831 Y=22654~22659)

本区は東山16-1, 2区の中で北東に位置する発掘区である。地表面での標高は約28.5~28.6mを測り、ほぼ平坦である。駐車場敷地に近接したため、当初の計画位置から1m西に設定した。

重機では5m×5mの正方形を掘り下げたが、搅乱もあって不整形となった。地表面から約30cm掘り下げたところでⅢ層（暗褐色土）を確認した。層面を人力で精査したところ、黒色シルト質土を覆土とする土坑13-1を確認した。覆土中には礫群も含まれている。直径1m強の円形である。覆土の状態から縄文時代よりも新しい時期の土坑の可能性が考えられた。

人力によるトレーナーの掘り下げは、発掘区南壁から1mの幅で行った。X=-112826~-112827のラインに相当する。50cmを掘り下げて、黄色粘土層を確認したが、遺構は確認できなかった。

土層断面は発掘区北壁面側のX=-112826ラインで観察し、記録した。表土から黄色粘土層までの堆積は基本層序に準じたかたちで確認することができた。黄色粘土層面はほぼ平坦である。

発掘区14 (図 II-16 図版 II-21 X=-112851~-112856 Y=22655~22660)

本区は東山16-1・2区の中で南東に位置する発掘区である。地表面での標高は約28.6~28.7mを測り、ほぼ平坦である。搅乱を避けて当初計画よりも1m南に設定した。

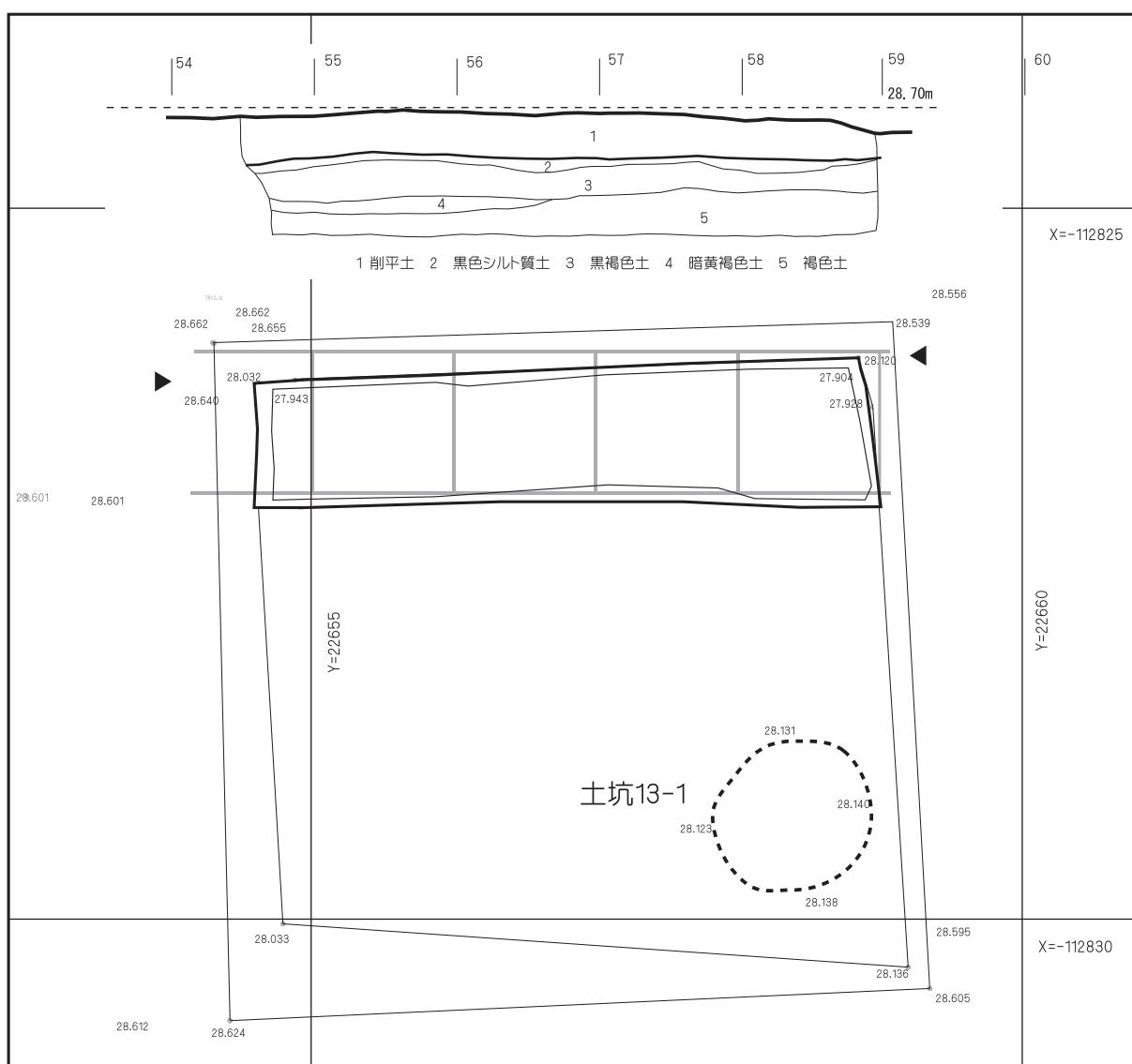


図 II-15 発掘区13

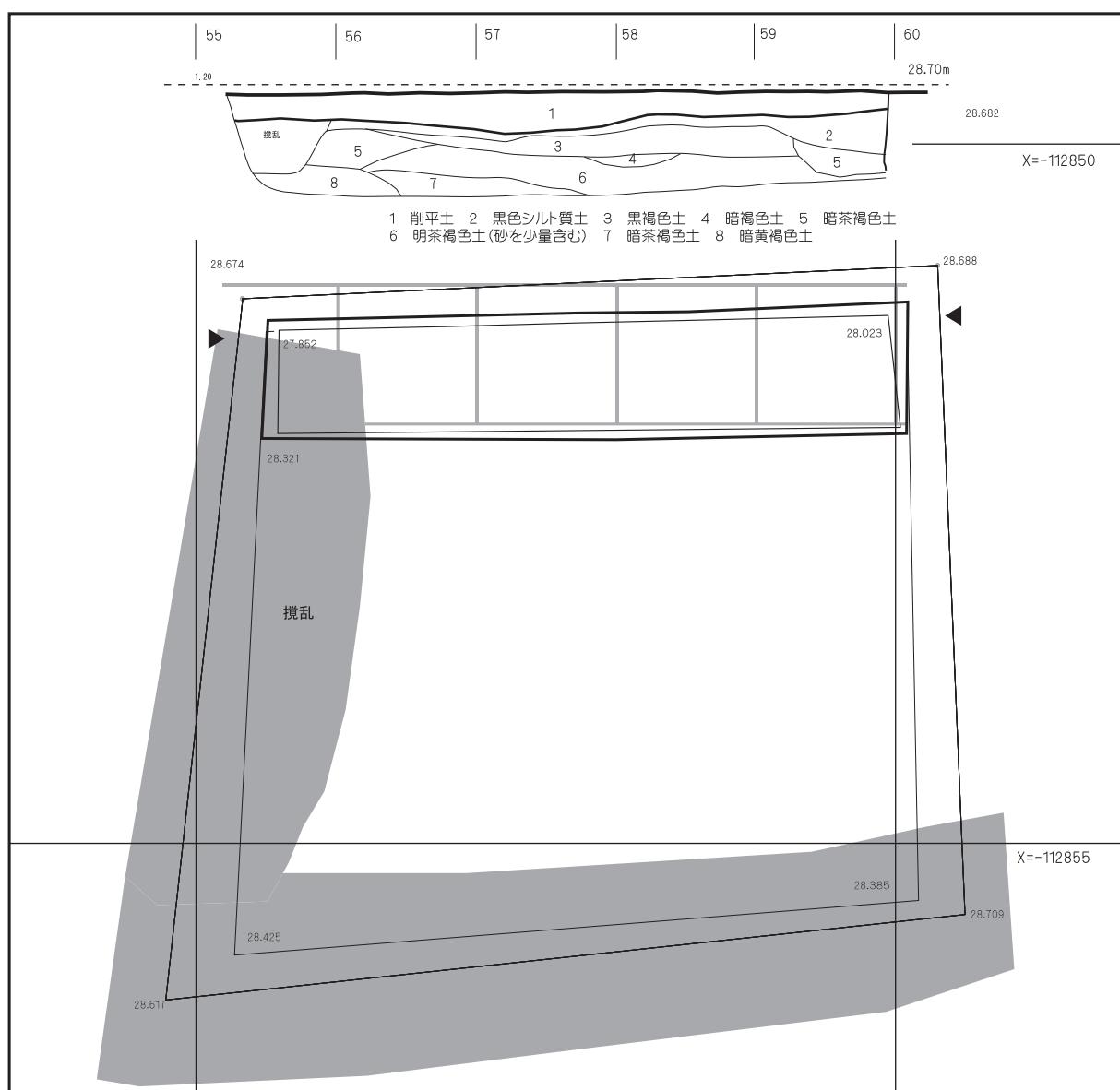
重機では5m×5mの正方形を掘り下げたが、区内の搅乱もあって不整形となった。地表面から約30cm掘り下げたところでⅢ層（暗褐色土）を確認した。層面を人力で精査したが遺構の確認はできなかった。

人力によるトレンチの掘り下げは、発掘区北壁から1mの幅で行った。X=-112851～-112852のラインに相当する。50cmを掘り下げて、黄色粘土層を確認したが、遺構を確認できなかった。

土層断面は発掘区北壁面側のX=-112851ラインで観察し、記録した。表土から黄色粘土層までの堆積は基本層序に準じたかたちで確認することができた。黄色粘土層面は西に向かって緩やかに下る傾向にあった。

(3) 出土遺物

出土遺物については整理作業中のため、次年度報告において詳細を掲載する予定である。今年度調査での出土遺物総点数は4966点である。土器類3368点、石器類1598点である。盛土遺構の堆積に含まれる遺物が多いことから、北側の発掘区に多く、南側の発掘区では極端に少ない。最も多い発掘区は



図II-16 発掘区14

11区で約1800点を数えた。

土器の時期は円筒下層 d2式期のものが最も多く、盛土遺構の主体もこの時期のものである。発掘区5においては円筒上層 a～b式期のものも見られるのが特徴である。

4 調査のまとめと今後の調査について

【調査方法と遺跡の保存状況】

14か所の発掘区では、重機により遺構確認面まで掘り下げた。街路に近接する発掘区などでは、範囲を予定位置より移動して掘り下げたところもある。

遺構確認面以下では発掘区毎に1m幅のトレンチを設定し、基底層とした黄色粘土層まで人力で掘り下げ、遺構の確認及び調査を行った。

遺物包含層は東山15, 16-1・2区ともに大きく損なわれることなく、良好な状態で保存されていた。東山15区の南側の発掘区のみ、削平が進み、表土から黄色粘土層までの層厚が小さい。また、人為的な堆積が複雑に絡む15区とは異なり、16-1・2区では本来のほぼ自然堆積に近い土層を確認することができた。

【遺構について】

遺構は、盛土遺構1か所、竪穴住居跡4軒、土坑（径1m前後）13か所、柱穴状ピット7か所、焼土12か所の遺構を確認することができた。土坑1か所を除きすべて15区内で確認された。

盛土遺構は発掘区1及び11区にてその表面を確認し、ごく一部ではあるが発掘区4、5でも確認された。発掘区3では搅乱のため確認できなかったが、一連のものとしてとらえると、西北西から東南東の方向に連続する可能性が考えられた。最も保存状態の良い11区では層厚30～40cmを測った。

竪穴住居跡は、遺構確認面で4軒を確認し、3軒についてトレンチ範囲内を調査した。いずれも床面を検出し、その内2軒で炉跡を確認した。柱穴状ピットを伴なうものも2軒確認した。

土坑は13か所を確認した。すべて掘り下げを行わず確認調査のみである。そのほとんどが発掘区6, 7, 8の15区南側の発掘区に集中している。それぞれの規模は様々ではあるが、直径1～1.5mの円形土坑が多くみられ、墓坑の可能性が考えられる。

焼土は、盛土遺構に伴うものが多く、II層（黒褐色土）の上面、上層でも確認された。

各遺構の分布を整理すると、調査区の北側に盛土遺構、中央に竪穴住居跡群、南側に土坑群のまとまりがあることがわかる。また盛土遺構と竪穴住居群では一部重複も見られた。

【遺物について】

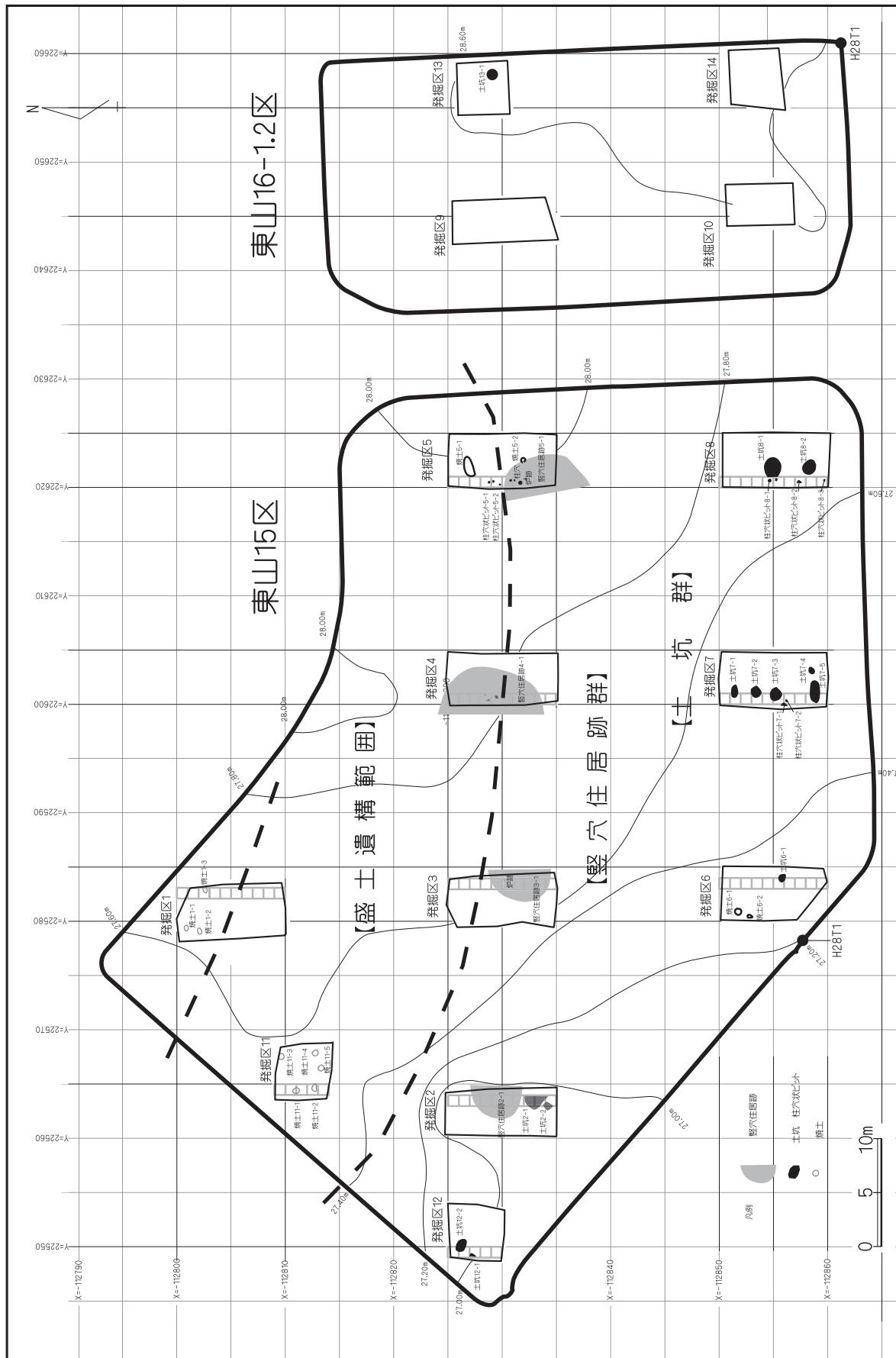
遺物は、土器、石器ともに盛土遺構の範囲を中心に多く出土した。竪穴住居跡や土坑に伴うものでは、扁平打製石器や石冠、石皿などの礫石器類が多く見られた。

遺物は現在整理作業中である。土器は円筒下層 d2式が主体（盛土遺構～竪穴住居群）で、発掘区により円筒上層 aからb式が多く見られる箇所がある（15区東側）。

遺物についての詳細は、次年度調査分と併せて掲載し、報告する予定である。

【盛土遺構について】

今回の調査結果の中では盛土遺構の存在が注目されるものと思われる。東山1遺跡において明らかになっている盛土遺構には、平成15年度に町教委によって調査された「捨場遺構」がある。これは面積約150m²、層厚が最大で30cmほどとされる。遺物はこの範囲から土器が30,262点出土し、円筒下層式から上層式の時期のものである。石器類は剥片石器が257点、礫石器が538点、石製品が3点のほか礫が252点、フレイク・チップが3,910点出土した。



図II-17 東山15、16-1・2区確認構造位置図

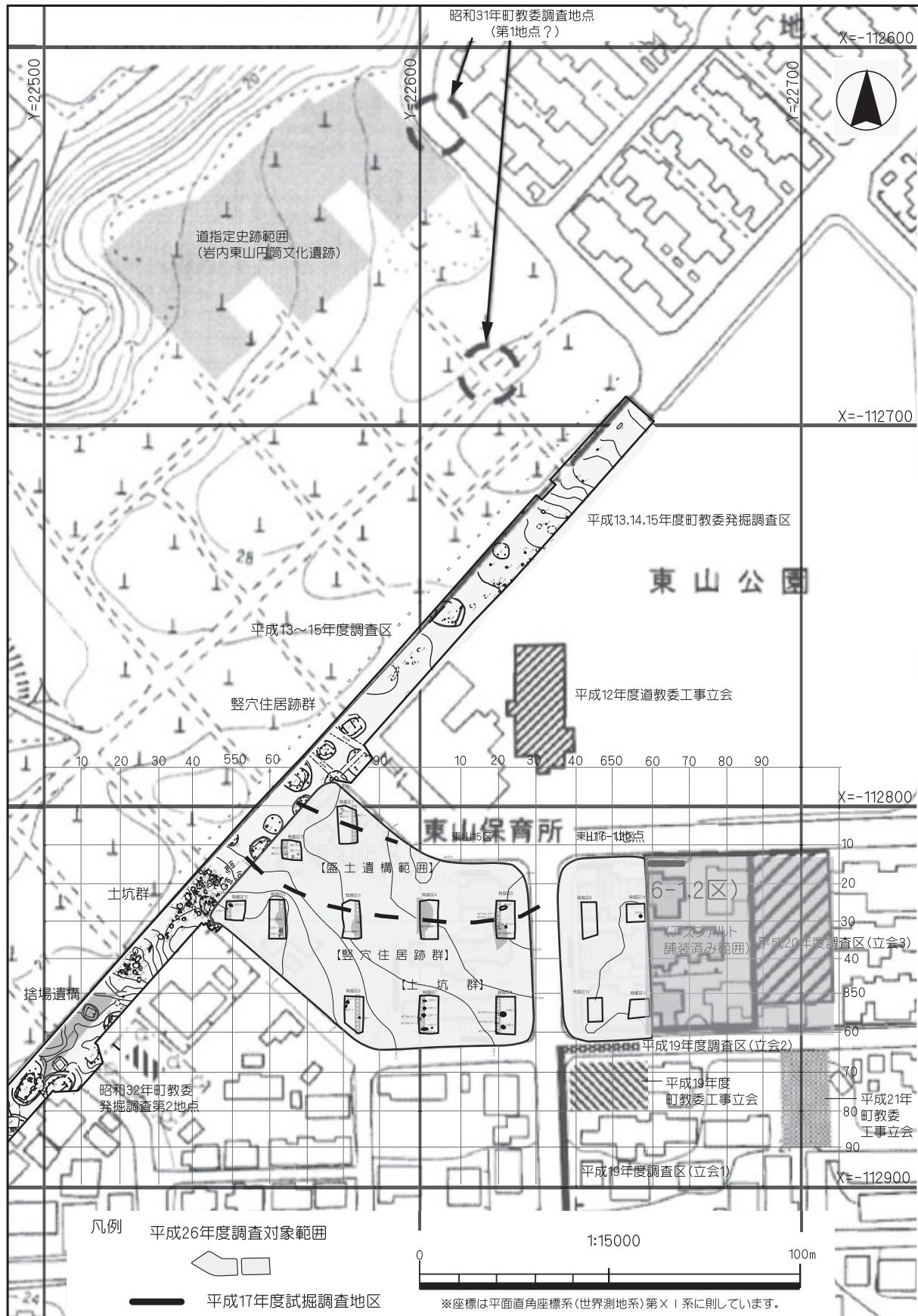


図 II-18 東山1遺跡内における調査結果概要

今回調査の盛土遺構とこの「捨場遺構」とは現時点では直接結びついてはいない。町教委調査の範囲で、本調査の盛土遺構の延長線上には盛土遺構の形跡は認められていないが、土層断面図では、この範囲では黄色粘土層がむき出しになっており、表土以下の堆積がすべて失われている状態にあることがわかる。本調査の盛土遺構が海側に連続する可能性は否定できない。

町教委の調査結果では、竪穴住居跡群、「捨場遺構」、土坑群、遺構の少ない空間を介してさらに土坑群、竪穴住居跡群と、遺構群にまとまりがあり、環状集落、馬蹄形集落の可能性も指摘されている。今回の調査結果はこれをさらに証明するものと思われる。今後その関連を整理することで、より広範な集落遺跡としてとらえられる可能性が強まったと考えられる。

【次年度以降の調査計画について】

平成27年度は発掘調査では道指定史跡岩内東山円筒文化遺跡範囲内のトレンチ調査が予定されている。また、関連資料の調査では、道指定有形文化財の岩内東山円筒文化遺跡出土の遺物について所在確認及び写真撮影などを予定している。

参考文献

- 大場利夫、桐井力蔵 1958 『岩内遺跡』昭和33年9月
 岩内町教育委員会 2004 『東山1遺跡』平成16年2月
 岩内町教育委員会 2010 『東山1遺跡Ⅱ』平成22年3月

表Ⅱ-1 岩内町東山1遺跡確認及び調査遺構数一覧

詳細	盛土遺構	竪穴住居跡		土坑		柱穴状ピット		焼土		発掘区毎の遺構数
		調査	表面確認	調査	表面確認	調査	表面確認	調査	表面確認	
発掘区1	(1)								3	4
発掘区2			1		2					3
発掘区3		1								1
発掘区4	(1)	1								2
発掘区5	(1)	1					2		2	6
発掘区6					1				2	3
発掘区7					5	1	1			7
発掘区8					2		3			5
発掘区9										0
発掘区10										0
発掘区11	(1)							2	3	6
発掘区12					2					2
発掘区13					1					1
発掘区14										
合計数	1	3	1	0	13	1	6	2	10	37
		4		13		7		12		

Ⅲ 湧別町シブノツナイ堅穴住居群の調査

1 調査の概要

(1) 調査要項

調査の名称 重要遺跡確認調査

遺 跡 名 シブノツナイ堅穴住居群 (I-21-35) 「道指定史跡 シブノツナイ堅穴住居跡」

所 在 地 紋別郡湧別町川西499-1、499-2、930、722-1・2・3、720、719、503、502-1・2、714、
717、718番地（町有地）

対 象 面 積 139,486m²

調査担当者 第1調査部普及活用課 課長 鎌田 望

主査 藤井 浩

第1調査部第1調査課 主査 吉田裕吏洋

(2) 調査の経緯

（調査に至るまで）

昭和38年10月に湧別町により、米村哲英を担当者として発掘調査が行われたのが本格的な調査の始まりと考えられる。（米村哲英「北海道紋別郡湧別町字川西シブノツナイ遺跡調査概報」）

昭和41年6月には湧別町、湧別町教育委員会により大場利夫を担当者とした発掘調査を含めた調査がなされている。665か所の堅穴を確認し、そのうち堅穴238、318号の2か所で発掘調査が行われ、堅穴が擦文時代の住居跡であることと擦文土器をはじめとする土器、石器の遺物出土が確認された。

昭和42年3月17日には、北海道史跡に指定される。指定名称は「シブノツナイ堅穴住居跡」で、面積は139,486m²である。当時は堅穴住居跡のくぼみの数が515個とされている。その後、平成12年に遺跡名称が変更され、「シブノツナイ堅穴住居群」となった。

（重要遺跡確認調査）

平成26～29年度の4年間において、現況平面図の作成及び空中写真撮影などの現況確認調査、堅穴群の構築時期や分布状況などの確認を目的とした堅穴の発掘調査、既往の調査などに関する関連資料の収集を行うことが指示された。特に今年度は現況確認調査から発掘調査に向けての準備作業をおこなうこととなった。

(3) 調査の経過

平成26年9月21日(日)、湧別町教育委員会において担当者林勇介学芸員との打ち合わせを行った。重要遺跡確認調査についての概要説明を行った後、現地確認を行った。史跡範囲全体を踏査し、関連すると考えられる境界杭2か所について確認した。また、史跡範囲内を通る道路や堅穴の損傷状況についても確認することができた。

踏査後、湧別町の資料館に保管されているシブノツナイ出土とされている遺物群を実見した。コンテナにして8箱ほどの擦文土器を主とする遺物群を確認することができた。

平成27年1月30日(金)に2回目の現地打ち合わせを行った。この折には町教委から牧野裕司教育長、岡崎公俊生涯学習課長、梅津茂樹課長補佐、中島一之学芸係長、林学芸員が出席されての打ち合

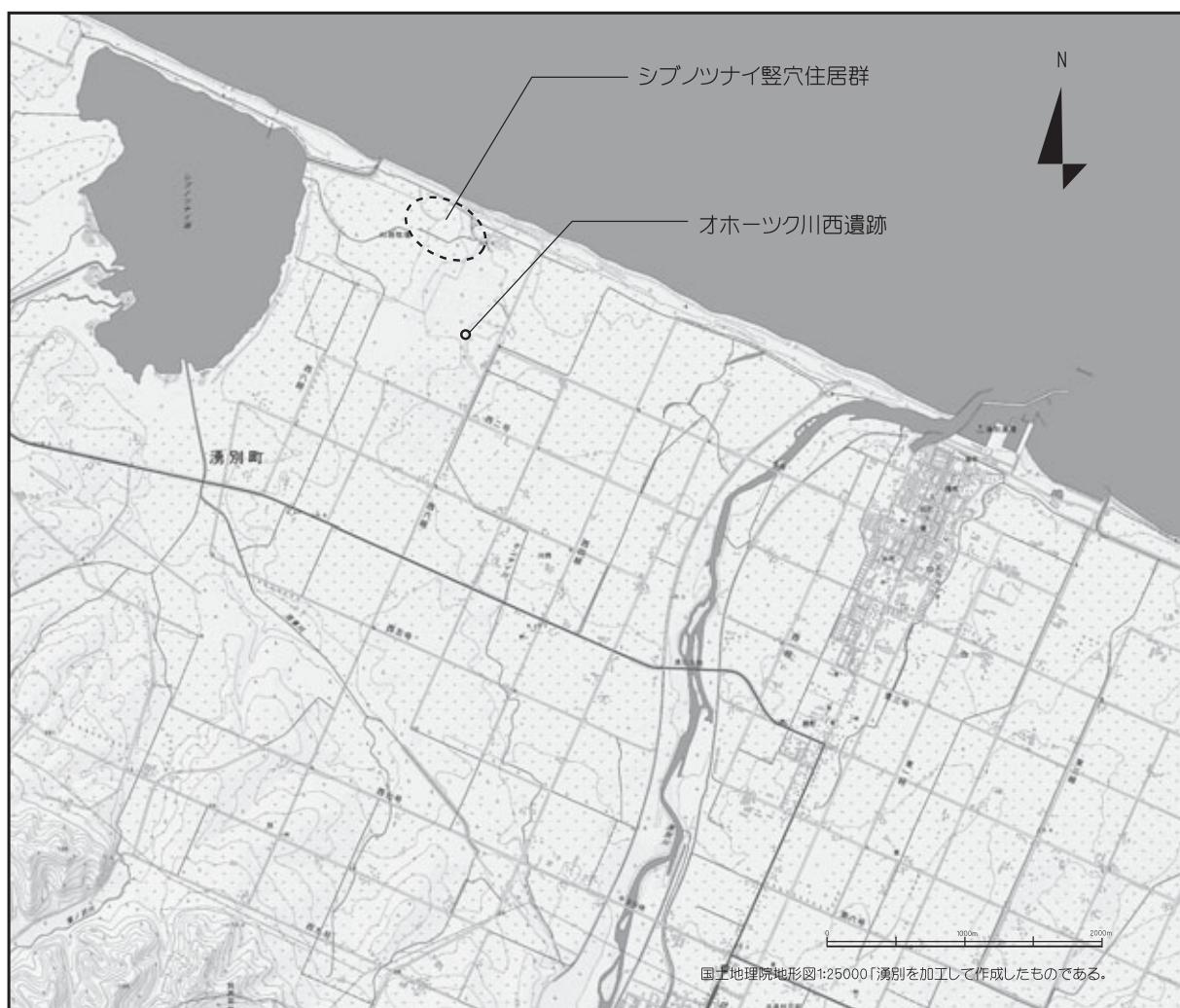
わせとなった。担当からは重要遺跡確認調査の概要及びシブノツナイ竪穴住居群についての調査計画及び詳細内容について説明をした。町教委からは空撮や聞き取り調査及び作業員の採用などについて協力いただけたこととなった。また、今年度末に、竪穴のくぼみが最も視認しやすい、積雪の残る竪穴住居跡群の写真撮影を予定しているため、遺跡現地では竪穴群の積雪の状況を確認した。

2 遺跡の位置と環境

シブノツナイ竪穴住居群は湧別町川西地区に位置する。湧別町は北海道の北東部にあり、オホーツク海沿岸のほぼ中央に位置し、平成21年に隣接していた上湧別町と旧湧別町とが合併してできた町である。このまちの中心には南西から北東方向に向かって湧別川が流れしており、この海と川により様々な地形条件が形成してきた。

遺跡のある川西地区は湧別町内の北東部に位置し、地形はオホーツク海に面した海岸段丘と、これを横切るように湧別川の支流の一つであるセンサイ川が流れている。センサイ川は現在では多くの河道が直線化されてしまっているが、本来は蛇行しながら下る旧河道として残っている。

遺跡はオホーツク海に面した標高約5mの海岸段丘上に立地している。竪穴群の分布は東西に長く、450m、南北幅が150mほどである。海岸段丘と段丘下との比高差は5mほどであるが、段丘の縁まで分布が及んでいる。



図III-1 遺跡の位置と周辺地形図

(川西オホーツク遺跡との関連について)

隣接する川西オホーツク遺跡は、センサイ川に面した海岸段丘上に立地する。シブノツナイ竪穴住居群の立地する同じ海岸段丘の北側（シブノツナイ）と西側端（川西）にあたる。

昭和35年に米村喜男衛により「川西遺跡」として発掘調査が行われ、オホーツク文化期の竪穴と擦文時代の竪穴を調査しているが、この時点では「シブノツナイ竪穴住居群」と川西オホーツク遺跡とは一体のものとして考えられていたことがうかがえる。シブノツナイ竪穴群は「野津牧場地点」、川西オホーツク遺跡は「伊藤地点」とされている。

3 踏査及び関連資料調査

(1) 踏査及び現況確認

踏査では、三角点と史跡の説明板のある竪穴群の東端から、海岸段丘の縁に沿って竪穴群の西端までの約500mを確認した。竪穴群を含む周辺の現況は牛の放牧地となっているため、草の繁茂が抑えられ、竪穴の落ち込みが明瞭である。また、竪穴群の南側には保安林（川西718番地）が横切っており、林の中にも多くの竪穴が点在している。

竪穴の分布は、竪穴群の東端から中央部にかけて密度が濃く、西端に向かって疎らになる傾向が見られた。また、竪穴の中には道路の敷設によって一部埋められているものも見られた。

竪穴の落ち込みの深さは約1～2mで、擦文時代の竪穴の特徴である、平面形が方形であることも明瞭に確認することが出来た。竪穴は一辺10mほどの大規模なものから、2～3mの小規模なものも見られ、大小が交じって分布している。落ち込みの周囲が平坦ではなく、起伏が見られることから、竪穴の掘り上げ土も保存されていることがうかがえた。

(2) 既往の調査と資料の現況

【昭和38年度の調査】

「シブノツナイ遺跡調査概報」によると、昭和38年10月に米村哲英が行った調査では、シブノツナイ遺跡の竪穴は概数約400と確認されており、そのうちのA竪穴、B竪穴、C竪穴の3つの竪穴を発掘調査している。それぞれの竪穴位置については、AとBの竪穴について「舌状台地の基部に」とのみ記載され、AB間の距離が約80mであることがわかるのみである。竪穴群全体の位置図なども付されていない。

出土遺物については、湧別町には所在しないことが今回の調査で明らかになった。網走市の郷土博物館所蔵の資料である可能性もあり、次年度以降の調査で確認する予定である。

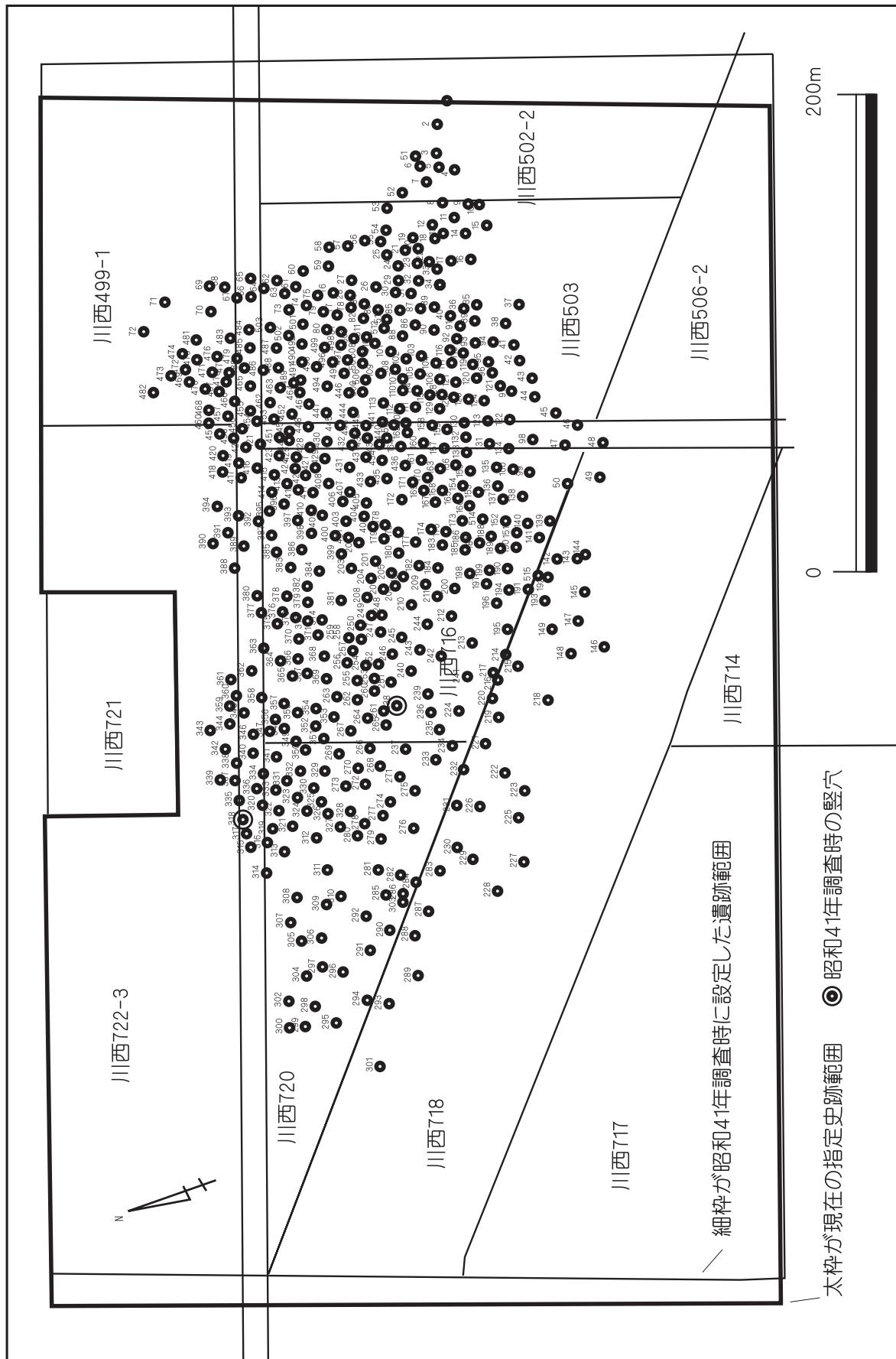
【昭和41年度の調査】

「湧別町シブノツナイ遺跡調査概要」（昭和41年度）によると、昭和41年6月に大場利夫を担当者とする調査では竪穴が665か所を確認したことが明らかである。そのうちの238号、318号住居跡の2か所で発掘が行われた。

出土遺物については、擦文土器や石器などが出土しており、これらは湧別町公民館に保管されていると記載されているが、町教委での調査により、公民館の火災によってこれらが焼失している可能性が高いことが明らかになった。また、この概要においては、調査時の写真などが掲載されているものの、竪穴の位置図などの掲載はない。

今回の資料調査では、この昭和41年時の調査写真が町教委の公文書に添付されたかたちで保管されていることが明らかになった。「概要」に掲載されている11枚を含めた57枚について許可を得てデジタルデータを入手した。このうち40枚を転載した（写真図版Ⅲ-3～7）。調査された竪穴を特定するた

III 湧別町シブノツナイ豎穴住居群の調査



図III-2 シブノツナイ遺跡立て穴位置図（昭和41年作成）

めの重要な手掛かりになると思われる。

【湧別町シブノツナイ遺跡立て穴位置図】

旧調査に係る図面類については、現時点では町所有の「湧別町シブノツナイ遺跡立て穴位置図」しか確認できていない。この「立て穴位置図」は縮尺1/1000の手書きの実測図で、豊穴の位置が○印で示されている。豊穴番号と思われる数字が付記されていることからおそらく昭和41年の調査時に作られたものと考えられる。判読できない数字もあり、すべてを確認できてではないが1～515までの豊穴が記載されている。この位置図には、地籍が記されており、現在の地籍図面との照合が可能であることが明らかになった。

(3) 「湧別町シブノツナイ遺跡立て穴位置図」

この位置図についての信憑性を確認するための検証を行った。位置図を現在の地籍図面と照合したところ、2つの問題点が明らかになった。

1つは位置図と現在の図とで遺跡の境界線にずれが生じている点、2つ目は豊穴群の位置が西側に向かうにつれて、現在豊穴が存在しない氾濫原にまで及んでしまう点の二つである。

最初の問題点について、大きくずれが生じているのは2か所で、東端と西端の南北に延びる境界線である。立て穴位置図が現地籍図より西に数メートル平行移動したかたちである。これについては、立て穴位置図に記載された地籍図に誤りまたはのちの変更などがあったことが考えられる。今後さらに調査をする予定ではあるが、現時点では地籍の変更などはなかったことが明らかになっている。

2つ目の問題点は、照合した図によって豊穴群の分布状況と現況との関連が明瞭になったことで明らかになった。指定範囲の東側では踏査時の状況と立て穴位置図とは整合しているが、西側は位置図によれば川西720区、722-3区にまで豊穴が及んでいることになる。現地の観察においては、この地区は海岸段丘の下にあたり、本来豊穴が存在しない範囲である。また、これとは逆に川西718区は保安林になっており、現地においても地籍の範囲が明瞭である。現地の踏査においても、この保安林内に多数の豊穴が見つかっていることから、現況と照合図の様子とはかなり異なることが明らかである。

4 調査のまとめと今後の調査について

今年度は踏査による観察結果と町教委所蔵の文書等資料に基づいて、既往の調査の調査内容と資料の所在について整理した。今後の測量作業によって、「立て穴位置図」など、旧調査の資料を活かせる可能性も強くなったと思われる。

また、川西オホーツク遺跡との関わりについて、立地する地形上は連続しており、あらためて一体の遺跡として捉えなおす必要も考えられる。豊穴群が連続する可能性も含めて現地での測量調査方法を検討したい。

参考文献

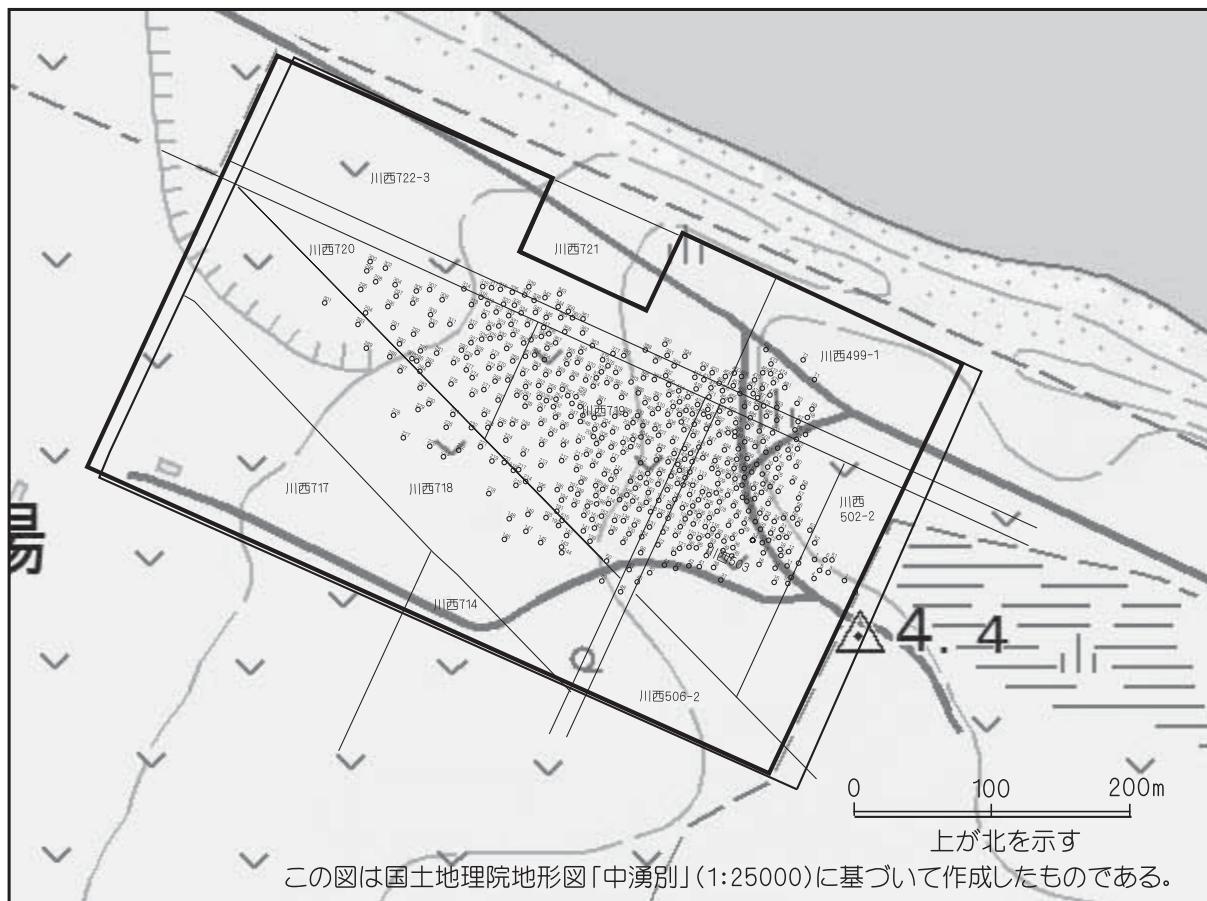
米村喜男衛 1961 『紋別郡湧別町川西遺跡調査報告書』昭和36年8月

米村哲英 (1963) 『北海道紋別郡湧別町字川西シブノツナイ遺跡調査概報』(昭和36年8月)

※発行年月不明につき（ ）内に調査年月を記載した。

湧別町、湧別町教育委員会 1966 『湧別町シブノツナイ遺跡調査概要』昭和41年

北海道立北方民族博物館 1995 『北方民族博物館調査報告 湧別町川西遺跡』平成7年3月



図III-3 国土地理院地形図と「シブノツナイ遺跡立て穴位置図」合成図

表III-1 発掘調査された竪穴一覧

竪穴名称	調査年時	外径	内径	形状	地表面から の最大深	付属する遺構	遺 物	位置
A竪穴		一辺 7 m	6.3 × 6.7 m	方形	-1.1m	炉跡(32×36cm) かまど(南壁中央) 礫の配列 柱穴なし	擦文土器片 約50点(床面出土) 紡錘車 2点 黒曜石製剥片石器 3点	図はなし
B竪穴	昭和38年 10月	6 × 5.8m	不明	方形	-0.62m	炉跡(85×70cm) かまど(南壁中央) 礫の配列 柱穴 (南東隅 1か所)	記載なし	A竪穴か ら南西 約80m
C竪穴		2.90 × 3.10m	不明	方形	-0.98m	炉跡 柱穴(4隅 4か所)	擦文土器 2個体(完形) 擦文土器片23点、 縄文土器片 2点 石器 2点	
238号		一辺 5.7m	不明	方形	-0.90m	炉跡(長さ90cm) 柱穴 4隅 4か所 かまど北西角壁 出入口部分	擦文土器深鉢 4点 高坏 2点 黒曜石製剥片 3点 紡錘車 2点	
318号 (上層)	昭和41年 6月	一辺 7 m	不明	方形	-0.8m	炉跡(直径45cm) 柱穴(北東隅) かまど(西壁)	擦文土器 深鉢形完形 1点 破片 35点 高坏 1点 後北式土器片 20点 石斧 1点 削器 9点 戸石 1点	2軒重複 している
318号 (下層)		不明	不明	方形				

IV 芦別市野花南周堤墓群の調査

1 調査の概要

(1) 調査要項

調査対象遺跡 芦別市野花南周堤墓群（野花南町3256, 3257番地）、野花南丸谷遺跡（野花南町3336-1番地）、野花南熊の沢遺跡（野花南町無番地）周辺

調査担当者 第1調査部普及活用課 主査 藤井 浩

(2) 調査の経緯と経過

本調査は今期の重要遺跡確認調査実施要領が通知される前に、平成24、25年度に行われた芦別市野花南周堤墓群での重要遺跡確認調査の結果に基づき、今後の調査方針を検討するための予備調査として行われたものである。先の調査結果を基に平成26年5月31日（土）芦別市にて芦別市星の降る里百年記念館長谷山隆博館長と打ち合わせたところ、以下の見解を得た。

- a 野花南周堤墓群については史跡範囲内での調査では削平や搅乱などが多く限界があるため、隣接地などで、遺物包含層を確認する方がよいと思われる。
 - b 周堤墓群の南側にかつて存在した「日時計状の配石遺構」について、配石は削平されてしまったが、その周囲には遺物包含層が残っていないかを確認することもよいと思われる。
 - c 野花南地区の空知川上流部、特に左岸の河岸段丘上は、「日時計状の配石遺構」をはじめ、野花南丸谷遺跡、野花南熊の沢遺跡など野花南周堤墓群と同時期にあたる縄文後期の遺構、遺物が確認されている。関連する資料として調査するほうが良いと思われる。
- 以上に基づき、同日、長谷山館長の案内により周辺遺跡の踏査を行った。

2 踏査の内容

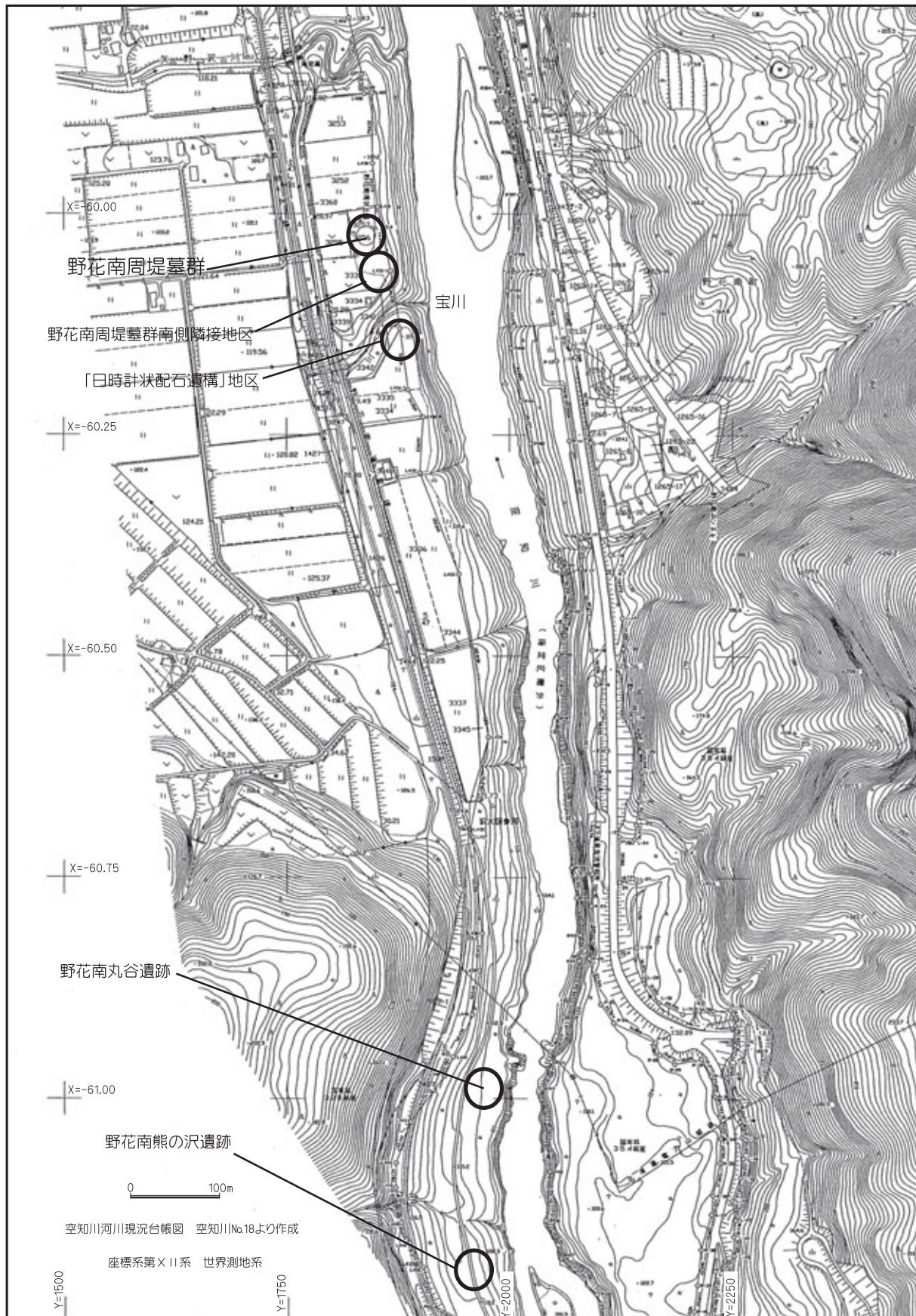
踏査は、昨年度トレンチを埋め戻した後の野花南周堤墓群を確認からはじめた。除草前でほとんどが草に覆われてはいたものの、トレンチ部分の埋め戻した部分には土が露わになっていた。

周堤墓より南側に隣接する地区は私有地で、許可を得て踏査をした。耕作などはされず、植林が広がっており、地形もほぼ平坦で、大きな改変なども見られない。遺物の採取などはできなかったが、遺物包含層の保存も良いと思われる。

周堤墓群から沢（「宝川」）を挟んだ南側にわたり、かつて空知川の崖の上にあったとされる「日時計状の配石遺構」の跡地（3335-1）を確認した。こちらも私有地で、ほとんどが耕作により改変されている。現況は数年間耕作が放棄された状態であるが、遺物の散布などは見られなかった。宝川に向かって下る斜面（国有地）などに一部包含層が残っている可能性も考えられる。

さらに南へ900mに位置する野花南丸谷遺跡は縄文時代後期末から晩期に至る遺跡で、昭和42、43年に発掘調査が行われている。多数の遺物とともに、土坑や集石などの遺構も確認されている。すでに造田工事によって失われ、平坦な耕作地となっている。

最も南に位置するのが野花南熊の沢遺跡である。昭和59年（1984）に大小の川原石が列をなしているとともに、その周囲で縄文土器や黒曜石片が散在していることが確認された。昭和61年（1986）には遺跡保存のための本格的な発掘調査が行われ、配石遺構2か所、縄文後期が主体の土器、石器など



図IV-1 芦別市野花南周堤墓群周辺の地形環境と遺跡位置図

を多数確認している。

現地はすでに草に覆われており、除草とともに確認を行った。安山岩と思われる大小の礫が見られたが、人為的な配置などを見ることは出来なかった。周辺は鉄道の橋梁などもあり、これを構築したときの礫と混交している可能性も考えられた。また、遺物の採取も出来なかった。

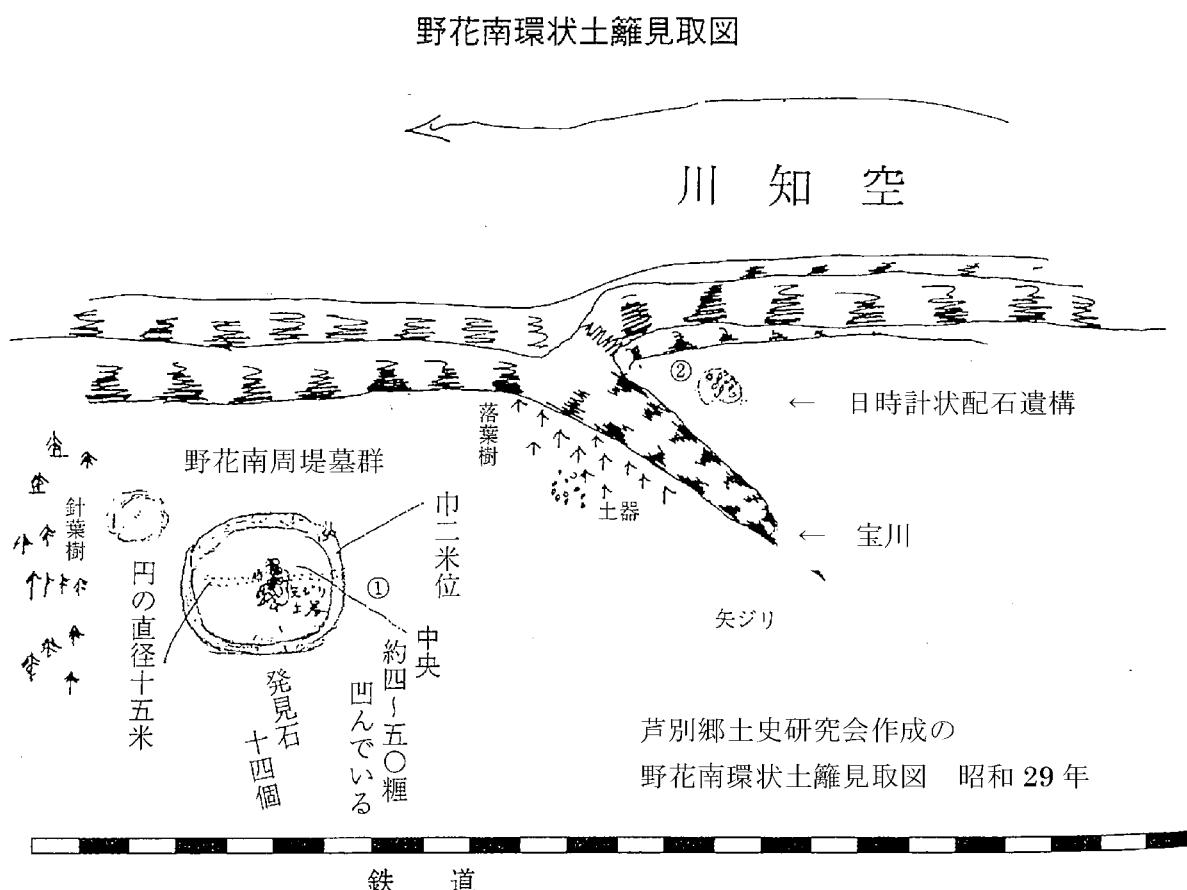
3 今後の調査について

踏査後の8月8日付けで今年度の重要遺跡確認調査実施要領が出され、今期4年間の調査対象遺跡には野花南周堤墓群関連の遺跡調査が含まれないことが明らかになった。

本格的な調査は今期では難しくなったが、今後はあらためて周辺遺跡についての情報収集につとめ、立地する地形、地質関連についての資料収集を行う予定である。また、機会があれば芦別市星の降る里百年記念館と共同で、野花南丸谷遺跡や野花南熊の沢遺跡などの出土遺物について再整理、再報告などを行いたいと考えている。

参考文献

- 芦別市教育委員会 1987 『芦別市野花南熊の沢遺跡』昭和62年3月
芦別市 1994 『新芦別市史』平成6年10月
矢野等 1998 「野花南環状土籬について」『郷土研究19号』平成10年3月



図IV-2 野花南環状土籬見取り図（郷土研究19号より抜粋）

写 真 図 版



図版Ⅱ－1 遺跡の位置と周辺の空中写真（国土地理院発行のものを複製したものである）1997年撮影



1 岩内岳麓から



2 岩内港から

図版 II-2 遺跡の位置と遠景



1 現況（北から）



2 指定碑周辺（南東から）

図版 II-3 道指定史跡岩内東山円筒文化遺跡 現況



1 現況（西から）



2 昭和47年町教委による「東山遺跡発掘由来」（南西から）

図版Ⅱ-4 岩内遺跡第2地点 現況



1 15区（西から）



2 16-1・2区（北西から）

図版II-5 東山15、16-1・2区調査前の現況



1 重機による表土除去（北から）



2 人力による精査（西から）



3 測量（北から）



4 トレンチの設定と掘り下げ（東から）

図版 II-6 調査の経過



1 全景（南東から）



2 東壁面（南西から）

図版II-7 発掘区1



1 全景（北西から）



2 東壁面（南西から）

図版II-8 発掘区2



1 全景（北西から）



2 東壁面（竪穴住居跡部分 東から）

図版II-9 発掘区3



1 全景（南から）

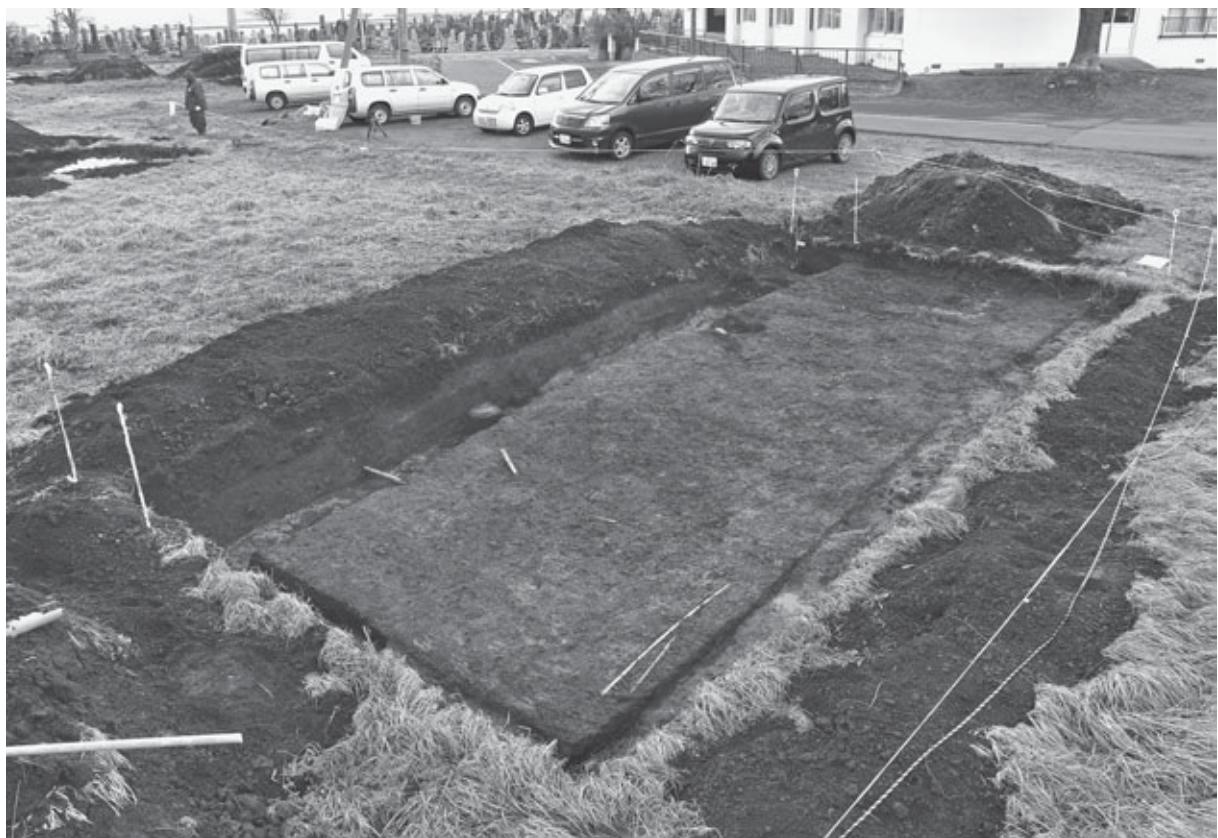


2 西壁面（南西から）



3 遺物出土状況（北から）

図版 II-10 発掘区 4



1 全景（南東から）



2 西壁面（南東から）



3 西壁面土層断面盛土部分（東から）



4 トレンチ内豊穴住居側（南東から）



1 全景（北西から）



2 トレンチ土層断面北側（西から）



3 トレンチ土層断面南側（西から）

図版II-12 発掘区6



1 全景（北東から）



2 柱穴状ピット7-1調査状況（東から）



3 西壁面（東から）

図版II-13 発掘区7



1 全景（南東から）



2 西壁面調査状況（東から）

図版II-14 発掘区8



1 盛土上面全景（東から）



2 トレンチ掘り下げ時の盛土上面遺物出土状況（南から）

図版 II-15 発掘区11



1 トレンチ盛土部分土層断面（東から）



2 トレンチ盛土部分南側土層断面（南東から）



3 トレンチ盛土部分北側土層断面（東から）



1 11区盛土部分遺物出土状況（北東から）



2 12区全景（北東から）

図版II-17 発掘区11、12



1 全景（東から）



2 北壁面（南から）

図版II-18 発掘区9



1 全景（南から）



2 南壁面（北東から）

図版 II-19 発掘区10



1 全景（南西から）



2 北壁面（南から）

図版Ⅱ-20 発掘区13



1 全景（北東から）



2 北壁面（南西から）

図版 II-21 発掘区14



1 全景（西から）



2 西側部分（北から）

図版 II-22 東山15区調査状況



1 重機による埋戻し（東から）



2 トレンチ養生状況（北東から）



3 トレンチ養生状況（南から）



4 東山16-1・2区埋戻し完了状況（北から）



5 東山15区埋戻し状況（南東から）

図版Ⅱ-23 発掘区埋戻し状況



図版III－1 遺跡の位置と周辺の空中写真（国土地理院発行のものを複製したものである）1997年撮影



1 住居群西側部分（東から）



2 住居群東側部分（東から）

図版III－2 シブノツナイ豎穴住居群の現況



1 保安林内の豎穴住居群（北から）



2 道路と豎穴の状況（西から）

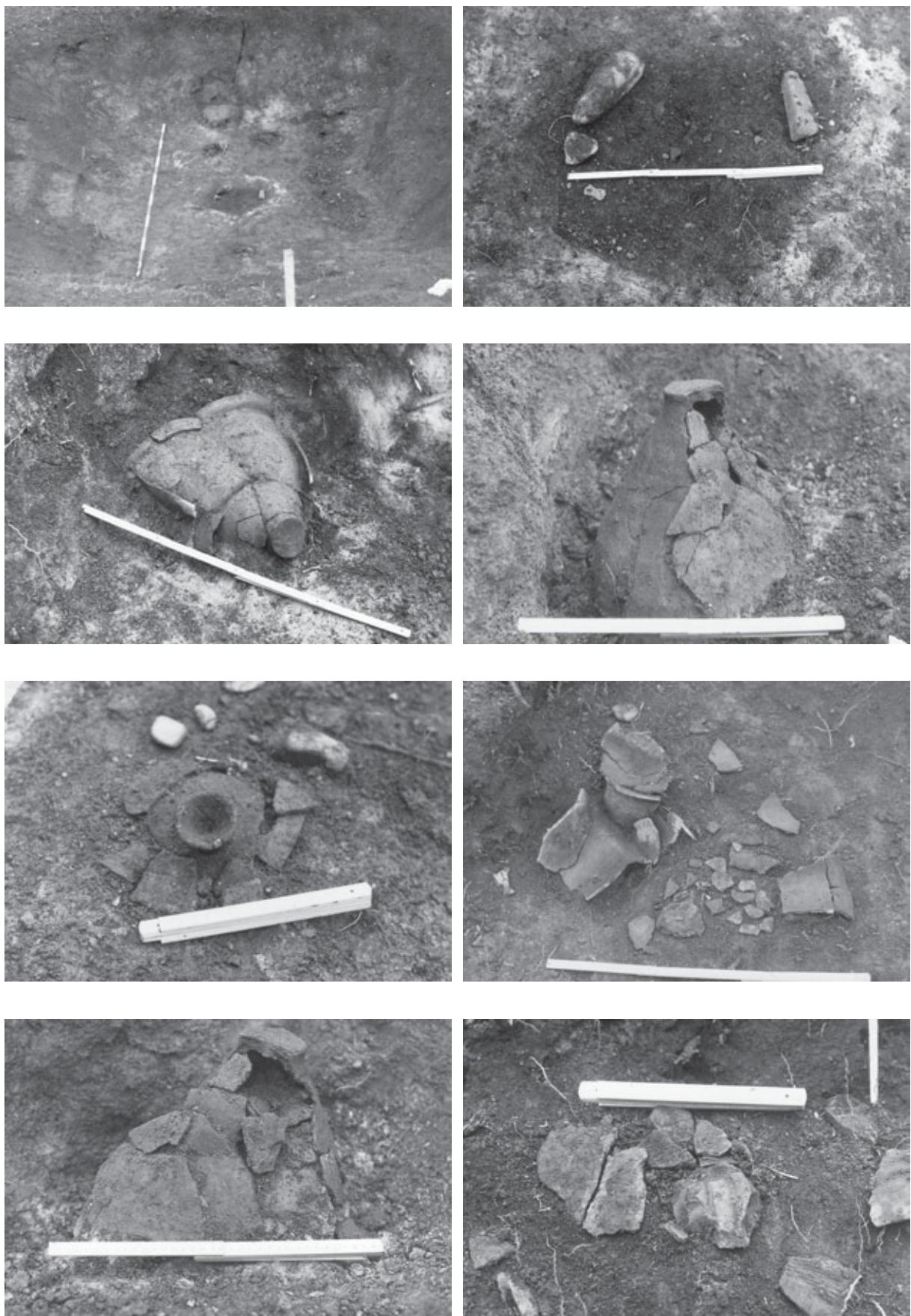
図版III－3 シブノツナイ豎穴住居群の現況



図版III－4 昭和41年調査時の状況写真（遠景 湧別町教委所蔵）



図版III－5 昭和41年調査時の状況写真（豎穴調査状況 湧別町教委所蔵）



図版III-6 昭和41年調査時の状況写真（竪穴出土の遺物 湧別町教委所蔵）



1 調査後の周堤墓群の状況（北から）



2 周堤墓群に隣接する南側地区の状況（西から）



3 日時計状配石遺構地区の遠景（南から）



4 日時計状配石遺構地区の現況（南から）



5 野花南熊の沢遺跡への経路（北から）



6 野花南熊の沢遺跡の遠景（東から）



7 野花南熊の沢遺跡での礫出土状況（東から）



8 野花南熊の沢遺跡での礫出土状況（西から）

図版IV-1 芦別市野花南周堤墓群と周辺遺跡の踏査状況

報告書抄録

ふりがな	ほっかいどうりつまいぞうぶんかざいせんたー じゅうよういせきかくにんちょうさほうこくしょ							
書名	北海道立埋蔵文化財センター 重要遺跡確認調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号	第10集							
編著者名	藤井浩 吉田裕吏洋 鎌田望							
編集機関	北海道立埋蔵文化財センター指定管理者 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1 TEL 011-386-3231							
発行年月日	西暦 2015年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村		遺跡番号						
ひがしやま　　いせき 東山1遺跡	ほっかいどういわいぐん 北海道岩内郡 いわいりょうひがしやま 岩内町東山 ばんち 15、16-1、2番地	01402	D-13-1	42度 59分 2.33 秒	140度 31分 37.01 秒	2014 1028～1112 (発掘調査)	600m ² (トレント 調査等面積)	詳細分布調査 (重要遺跡確認調査)
シブノツナイ たてなしのきょあと 堅穴住居跡 (道指定史跡 シブノツナイ 堅穴住居跡)	ほっかいどうゆうべつぐん 北海道湧別郡 ゆうべつちょうかわにし 湧別町川西 499-1、499-2、 930、722-1・2・3、 720、719、503、 502-1・2、714、 717、718番地	01559	I-21-35	44度 14分 40.14 秒	143度 34分 32.56 秒	2014 0921 2015 0130 (踏査)	139,486m ² (史跡指定 範囲及び 測量範囲)	詳細分布調査 (重要遺跡確認調査)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
岩内町 東山1遺跡	集落跡	縄文時代前期 ～中期	盛土遺構1 堅穴住居跡4 土坑13 柱穴状ピット7 焼土12 (表面確認分を含む)	縄文土器(円筒下層式～上層式) 石器(北海道式石冠、扁平打製石器)			次年度に道指定史跡範囲を調査予定	
湧別町 シブノツナイ 堅穴住居群	集落跡	擦文時代	堅穴住居跡665 (昭和41年調査時)				今年度は踏査のみ、 次年度に分布測量調査の予定	

北海道立埋蔵文化財センター
重要遺跡確認調査報告書 第10集

発行年月日 平成27年3月31日

編集 北海道立埋蔵文化財センター指定管理者
公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

発行 北海道立埋蔵文化財センター

〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1

TEL 011-386-3231 FAX 011-386-3238

URL <http://www.domaibun.or.jp>

印刷：社会福祉法人 北海道リハビリー

〒061-1195 北広島市西の里507番地1

TEL 011-375-2116(代)・FAX 011-375-2115
